昭和46年12月26日発行通巻42号(毎日曜日発行)　昭和46年２月５日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

12/26
220円
42

# 週刊 世界動物百科



朝日新聞社

## 読者のみなさまへ

**こんな動物が登場します**　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表3参照》

**総目次と総索引がつきます**　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

**『私たちの仲間』のページ**　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

**ファイルで保存してください**　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第1号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

## 目　次

**世界動物百科　第42号**

**カラーページ**



**私たちの仲間**



凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
　和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
　和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460　TEL052－231－8131

## 次号予告

12月22日発売



世界動物百科
43号　1／2・9

**カラーページ**



**私たちの仲間**

# 私たちの仲間

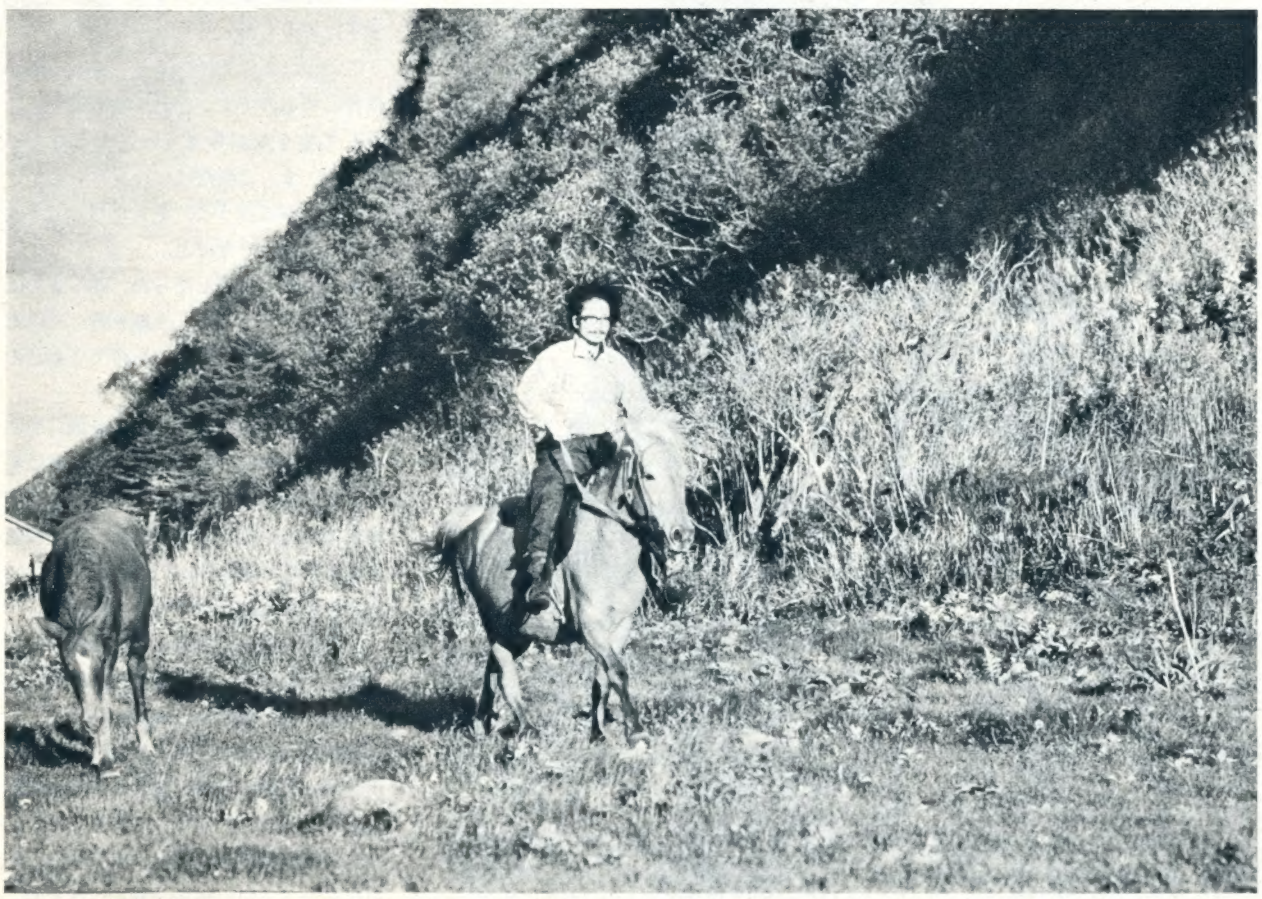
42号…12月26日



アミちゃんは星子を自分のウマだと
決めている
1人と1頭は，深い友情で結ばれた

# ウマと共に

畑　正憲



乗馬訓練は理屈抜き，体感だけの〝畑式乗馬術〟だ

おそい日の出を待って散歩に出た。

赤い半月——。

晩秋には珍しい霧がかかり，対岸の灯は見えない。水平線からさほど離れていない位置に不吉な色の月が浮かび，その下の波がオレンジ色に輝いて足元まで届いていた。

秋はもう終りだ。ハンノキと枯れたシシウドが黒いシルエットになり，たっぷり夜露を含んでいる。冬が近づくにつれ，夜と昼の気温の格差が大きいため，びっくりするほど夜露がおりる。昼間はからからに乾いた窪地に，夜になってたっぷり水が貯まっていたりする。

その水貯まりは銀色の鏡。スプーンをちらばしたように光るのは，枯れ残った草の葉である。

半年——。ここへ来て半年以上の歳月が流れたなんてとうてい信じられない。まだ昨日上陸した感じがしたりする。しかし，動物は確実に大きくなった。

ヒグマのどんべえは100キロ近くに成長し，荒々しい野性の表情をのぞかせるようになった。

手が痛むのは，ちょっとしたミスをやらかしたせいだ。キツネの銀に餌を与え，糞を掃除してやった。その手を洗わないまま首輪に引綱をつけようとしたその瞬間，ガブリとやられてしまったのだ。恥ずべき油断である。

なに，さほどたいした傷ではないが，片方の犬歯が親指と人さし指の中間，もう一方が中指と薬指の中間にささった。骨がミシミシ音をたて，顔を真赤にして踏んばったっけ。

叱ったら2秒ほどで離したけれど，み

るみる紫色にはれ，出血が４時間以上とまらなかった。ヤケクソで仕事に向かったが，原稿用紙が血だらけになるので，こうして散歩に出た。

どんべえに咬まれたのなら，痛くても痛くないから不思議だ。よくぞ大きくなってくれた。血がとまらぬ位，ものの数ではない。昼間，私はついにやった。四つん這いになったヒグマの背にまたがり，足を地から離したのだ。

１秒。

そしてまた１秒……。

僅かな時間でもろくもズッコケたが，とうとうクマの背に乗ってやった。

こんなに嬉しいことが他にあろうか。

島の真隊長である私は，おごそかに笑ってやった。

妻も笑った。これが本当のカカ大笑である。

咬まれると言えば，私はウマにまでやられた。４月，島にまだ残雪がある頃，背中をガブリとやられたのである。弟のヒゲもやられた。ヒゲの方は事情がいささか深刻で，首筋を深くやられ，大事件になりかねないひどさだった。

これも油断が原因である。ヒグマの匂いを身につけたまま妊娠したウマを扱ったのでは，相手が暴れない方がどうかしている。

ウマの名はボンコ。

最初その名が嫌いだったがもう慣れた。北海道の人はよほどボンコという名が好きらしく，私は10通以上，うちのウマと同じだという手紙をいただいた。キツネにボンコと名づけた人までいるからびっくりである。

そのボンコは島で子を産んだ。ムツゴロウ家の伝統にそむかず，メスの子ウマを安産してくれた。

子ウマの名は星子。島の草を食べ，すくすく育っている。

月が昇るに従って，明るくなってきた。霧の層を抜け，赤味が薄れてきた。とり澄ましたすんだ黄色になって，青白い光が渚で波と遊んでいる。

——ぶるるるん。

ボンコが私を呼んだ。

いつの間にか，私はウマの遊び場にしてある島のはずれの台地まできていたのである。夏にたっぷり乗り回して以来，ボンコは私の匂いを嗅ぐと唇をふるわせて呼ぶようになった。

私は呼びかけた。

「ボンや。星や」

ボンコは，ど，ど，どっと駆けてきて，私の胸に鼻面を押しあてた。草よりもっといいもの，米か配合飼料か塩を要求しているのである。

星子の方は人間が珍しくって仕方がないらしい。ジャンバー，ズボン，ポケット，ベルトなどを，いちいちくわえて点検している。

餌を用意してこなかった私は，鼻面を撫で，たてがみをさすり，あご……長い顔の裏に当たる部分を指で掻いてやった。ここはウマの急所で，大抵のウマが目を細めてよろこんでくれる。

親子とも，夜露でしっとり濡れていた。

特にたてがみはたっぷり水を含んで，さわっていると，ジャンバーが濡れて黒くなってゆくのがはっきりわかる。もうそろそろ夜は小屋に入れる日が近づいたようだ。

血統書こそないが，ボンコは道産馬である。道産馬は道産子とも書かれるが，人間とまぎらわしいので，ウマの字を当てることの方が多い。

釧路でタクシーに乗ったら，運転手がこう説明してくれた。

「うちの社長は道産馬を集めるのが趣味で，何十頭と持っています。道産馬は北海道原産のウマで，なりはちっこいけど，力は強いし，寒さには強いし，それは素晴らしいウマです」

北海道のタクシー運転手は，夏期長距離の客を乗せ，観光の案内係も兼ねるので道内の風物にはくわしく，お喋りが好きな人が多い。けれども，耳学問には誤りがしばしばある。

道産馬が北海道原産だというのもその１つである。東北地方の地馬が連れてこられ，矮小化したというのが真実であろう。寒さに飢えがプラスし，動物が生きてゆける状態ではなかったらしい。

開拓のために連れてきたのはよいが，夏使って冬はほっぽり出す。そのため，共食いまでしたし，首まで雪に埋まって木の皮をかじっていたという。

人は勝手なものだ。北海道の歴史をひめたその道産馬でさえ，利用価値がなくなると飼い殺しにして，年々頭数が減ってきている。車がウマにとってかわったといえばそれまでだが，私などは，やはりこれも北海道の遺産だとしきりに思えてならない。

何億もする競走馬は私には無縁である。美しいし，欲しくないと言えば嘘になるけれど，それよりも駄馬とののしられるウマの方を飼ってみたいという気になる。

駄人には駄馬が似つかわしいではないか。北の島で夜語り合うのには，その方がふさわしい。

ボンコを買ったおかげで，私はバクロウと呼ばれる人ともつき合った。軍馬の需要が多かった頃には，肩で風を切って村や町を歩いていた人たちだ。今では暮しに困っているらしく，洗いざらしの洋服を着ているが，それでもウマへの未練がたてずに細々と飼い続けているのだ。



畑さんが呼ぶと，母ウマのボンコは駆け寄ってきて鼻面を押しあてる

ボンコの馬主もそうだった。家は浜中の駅の側，１等地にあるけれど，壁は外から板を打ちつけて何度も修理され，屋根は傾き，タタミはすり切れて黒ずみ，最初板の間と思ったほどだ。

馬主はこう言った。

「ボンコはかしこいウマです。この６年ばかりわたしの足でして，町の寄合で酒くらっても，ボンコがいれば安心です。背にはいのぼって，さあ帰れや，そう言えばいいのです。テクテク歩いて，わたしがずり落ちそうになったら突然立ち止まり，ヒヒーンとないて教えてくれるのです。農業用の水汲みに使ったりしましたが，おとなしいウマです」

18歳のボンコを彼が手放す気になったのは，前の年，白いメスの子をボンコが産んだからだ。

これは目もさめんばかりの白い体毛を持つ当歳馬である。よく見ると目が赤いから，アルビノ（白子）に違いない。一人前になったこの白馬を緑の原野に立たせたら，どんなにか素晴らしいだろう。そう思って私は訊いてみた。

「こちらはどうですか？」

「え」

「ゆずる気持はありませんか？」

「ダメだよ，そんな」

老人は腕組みをしたまま，強い口調で言下に否定した。

「こいつはようく仕込んで，ボンコの２代目にするのです。それが楽しみで，こうして生きながらえているようなもので。……ま，これだけはカンベンして下さいよ。本当言うと，ボンコだって手放したくはないのだけど」

老人はひとり暮しだった。昨年まではパイロットファームに土地を持っていたが，それも売り，子ウシを育てて生計の資にしているのだった。

引き取った時，ボンコは痩せ細っていた。冬の間満足に飼料を貰えず，外にも出して貰えなかったのだろう。ちょうど換毛期にもさしかかっていたので，脱落し始めた毛に糞と尿がこびりついて，ふた目と見られぬ見すぼらしさだった。

でも私は老人を責める気にはなれなかった。かわいくっても満足に餌をやれぬ悲しみの色が彼の目にはあった。

島の小屋に収容してからというもの，ボンコは気違いじみた貪欲さで配合飼料を食べ始めた。１日中口を動かしていなければ気が済まず，よもや届くまいとたかをくくっていた飼料の袋まで首を伸ばし，袋を食い破って中味を食べていた。

「かわいいわね」

こわごわとウマ小屋をのぞいてきた娘が報告した。

「お腹の赤ちゃんはわたしのものよ。きっとボンコよりずっとかわいいはずだわ。でも，ウマってすごいわね，おならが。約1分に1発でしょ。それも低く静かに，スーッとでてきて，くさいくさい18歳だもの，小屋の戸をすこし開けて置いたのよ。……だって，ガス中毒で死ぬおそれがあるんだもの」

ウマ小屋の掃除がひと仕事だった。雪がとけ，青草が萌え始めれば，外で飼うので手数は省けるのだが，小屋に入れてある間中，毎日糞出しをし，枯草を刈って下に敷いてやった。

ウマの妊娠期間は長い。ほぼ1年，子を腹の中で育てる。

私は清潔になったウマ小屋で，ボンコの腹に耳をつけ，かすかな胎動の音に聞き惚れ，ごく僅かずつ自分のウマに変えていった。ボンコはクマの匂いにも慣れたのか，日に日に私を信用するようになり，どうかすると，寝そべったまま私の愛撫を受け入れたりした。

その瞳の奥は深いブルー。いつも何か深い哀しみをたたえている感じで，私は人よりやさしい生きものだと勝手に考えたり，こんなに大きな動物を自分のものにしていいものだろうかと夢見心地であった。

お産は軽かった。何度か経験しているので，私よりボンコの方が落ち着いていた。それでも，最後の陣痛がきた時には腹を波打たせ，びっしょり汗をかいていた。

動物といえども，回を重ねる毎にお産への反応は違ってくる。神経質な個体なら，興奮の末，失敗してしまう例もある。でも2回目には余程落ち着いて，母親らしくなるものだ。

乳腺の発育の具合も，初産と経産の動物では違うようだ。初産の場合にはためらいながら大きくなってゆく感じで，産む日になって急にかたく張ったりする。幾度もお産をした動物では，ゆっくりごく自然に大きくなり，手でさわるとたっぷりした余裕が伝わってくる。

種類によっても違うが，たいていのウマやウシはいわゆる後産を食べてしまう。本来草しか食べないはずなのに，お産の直後だけは食物の好みが変わってくるのだろうか，それとも胎盤を食べる行動だけは，食性とはまったく関係がない行動だろうか。手元にある本で調べてみたが，ここらの動物学は空白だった。

誕生直後の子ウマはけなげである。すぐさま立ち上がろうと努め，何回も転び，転ぶ度にたくましくなってゆく。

そして約30分から1時間たつと，立派に自分の足で立ち，乳を捜すようになる。

その仕草がまたかわいい。手近にある突出したものなら何でもいいらしく，かいば桶にはさまったわら，小屋の壁にこびりついた草，親の腹の毛，私の洋服のすそにまでしゃぶりつき，舌を丸めて含み，音をたてて吸った。

馴らすのなら，この時期に親から離せば最もいいのだろう。子ウマは，大きなもの，動くものへ興味を示し，その側へ寄り乳房をまさぐる。大きめの哺乳瓶さえ用意したら，ほぼ完璧に自分を親だと認識させることが出来るだろう。私は，子ウマの体調をそこなわずに済む人工乳が手に入ったら，一度ウマの母親になってみたいと企んでいる。

しかし，一夜明けたら，もう子ウマは母親のものである。ウマ小屋の戸を開けた途端，子ウマの星子はとびはねて母親の方にすり寄るし，母親の方も体で子ウマをかばうようになった。人がいなかった5時間か6時間のうちに，すっかり母と子の結びつきが完成してしまったのである。

私の見聞や経験では，草食獣の場合，出産直後の3,4時間の間に，仕残された仕事がたくさんあるように思える。というのは，ご存知のように草食獣は出産後すぐ活動し始めるから，親の認識がごく短期間に完成してしまう。そのしくみを調べるのが楽しみになり，私は来年にはこの島よりもっと広い所へ引っ越す予定である。乳が入手しやすい点から考えると，ウマよりウシの方が実験には便利だろうが，ウシにせよウマにせよ，家畜を使った動物学が案外と面白い結果を産む予感が私にはある。

それはさておき，星子は翌日から元気に島の台地を駆け回った。尾を水平に保ち，なかなかのスピードである。私が全力疾走をしても追いつかぬほどだから，かなりの速さだ。

ボンコの方は，子ウマが心配でたまらないらしい。ちょっとでも姿が見えなくなると，唇をふるわす例のいななきで星子を呼んだ。

星子が産まれた3日ほど後のことだった。ボンコを育てた老人が，オレンジと黄の紐であんだ子ウマ用のくつわを持って海を渡ってきてくれた。

「ほう，またメンタじゃないかね」

「そうです。お蔭さまで」

「よくよくメンタ腹じゃな，このウマは。これまでメンタばっかり産みおって。ねえ，ムツゴロウさん，ボンコは馬籍上では刺毛といって，栗毛の間に白い毛が生えてくる。今度のコッコがどんな色になるかは，まつげを調べることじゃ。昔から，まつげに白いものが混じっていたら，純粋な栗毛にはならないと言われてるからな」

そう言って老人は，種馬の世話をして帰って行った。

ウマは出産後ほぼ1週間で発情を迎える。品種にもよるが，それから20日でも



「ホシ。こい！」と子ウマの星子を従え，アミちゃんは得意満面である



空に舞うカモメ，地を覆うタンポポ　美しい自然のなかをさっそうと進む

う一度発情があり，それを逃すと1年交配を見送らねばならない。殊に北方の品種は，春から初夏にしか発情を示さないので，出産後すぐに再婚の心配をしなければならないのだった。

交配には星子の実の父親を連れてきた。ボンコよりひとまわり小さな黒いオス馬で，人を見たら顔を下げ，首でぐいぐい押してくる妙な癖があった。

父親がわかるはずはないと思うのだが，星子は黒馬とよく遊び，乳を吸いたくなった時だけ母親の側へ帰ってくる。それが気に障るらしく，ボンコが黒馬に示す憎しみは並ならぬものがあった。黒馬が星子を愛撫しようものなら，前足を上げ歯をむき出して威嚇した。小型のウマといっても300キロ以上はあるので，側にいると，すさまじい迫力だった。子を持つ母親は強く，ウマの世界で誘拐犯になるのは大変であろう。

交配が済むと，わが一族の乗馬訓練である。島の上にある広い草原で特訓を繰り返した。

これは理屈抜きの体感教育。

「パパ，どうにかしてよ」

「これボンコよ。お前はどこへ行こうとしているのか」

まったくあどけない話である。上に乗ってやさしくささやけば，ウマが目的地へ運んでくれるものだと家族全員が信じこんでいたから天下泰平である。たづなさばきや乗馬術なんて誰も知らなかったし，腹帯のしめ方にしても我流だった。

それでも，10日もするとウマの背になじんできたから不思議である。それぞれ自分の意志を伝える方法を発見し，スズランとクロユリが咲き乱れる原野を駆け回った。

清らかな海，ヒオウギアヤメやタンポポの大群落。空にはカモメ，お伴はイヌ。美しい自然の中をウマの背に揺られて散策していると，私の胸の中には，限りない夢が広がっていくのだった。

——動物と本当に共同生活が出来る楽園を作ってみたい。

また家族に苦労を強いることになるだろうが，更にここより広い原野に王国を築く決意を私はかためていた。

この半年，私たちは何をしていたのだろうか。苦闘と言ってもよいし，ほんの一瞬まばたいた位の短い夢を見たとも言ってよい。生涯で何度も得られぬ貴重な宝も手にした。

島に住むからといって，漁師の手をわずらわしたわけではない。物資の輸送から動物の運搬まで，一切自分たちの手でやった。人は無駄な努力と判断するかもしれぬが，ここらで本心を打ち明けるなら，私たちの悲願は野生動物の保護である。



星子は，島を駆け回ったり，母親にすり寄って甘えたりしながら元気に育っていった

一口に保護と言うのはやさしいが，野生の動物を飼って増やすためには，重労働に耐える力と，動物の女中になる地を這う生活に慣れる必要があった。保護には愛が必要であり，愛とは具体的な営みである。小屋をつくり，ワラを敷き，食事を考え，糞尿の始末をする。本来，血と汗の中にこそあるべきものだ。

うれしかったのは，娘の中に革命が起こったことだ。のろまで，父親に似ず臆病だったのだが，

「ハイッ」

と大声で返事するようになったし，動物と友だちになれるようになった。

ボンコにもさっそうとまたがり，思いのままに走らせるし，自分のウマだと決めたせいか，星子をとってもかわいがる。チャボの配合飼料がしばしば盗難にあうと気をつけていたら，犯人は娘だった。米，ニンジン，芋，配合飼料などを，こっそり持ち出しては星子に与えていたのである。

努力の甲斐あって，星子は娘によく馴れた。日暮れ時など，リンドウとトリカブトの青い花が飾る斜面の下で，星子は娘にこっそり耳打ちしたり，歯をむき出し，上唇で娘の鼻を愛撫したりしている。

「ホシ。こい！」

「ルン，ルルルル……」

1頭と1人は友情で結ばれ，7頭に増えたイヌがお伴し，夕刻の散歩である。コンブ漁が終り番屋から人が消えた浜を，動物に囲まれて小さくなるわが子を見ていると，私はここへきてしみじみよかったと思う。

月は中天に近く，赤い色はほぼ完全に消えていた。海は青い闇の中に沈み，波が崩れる渚だけが白い。

ボンコと星子は黒いシルエット。

お互いに相手の体毛を軽くかみ，飽きることを知らない。サルのグルーミングに当たるのか，換毛期だからか，毛についた塩をなめているのか，よくはわからないが，静かな夜の光景だ。

星子はまだ私には馴れず，ブラッシングを嫌ったりする。どんべえにかまけて，あまり側にいてやれなかったせいだ。

もう風が冷たい。雪がちらつく季節はすぐそこまで来ている。どんべえを冬眠させるのも間近だ。そうしたら，ボンコと星子を離し，星子だけを島の小屋に置こう。自分の手で取り上げた星子と長い冬の起居を共にし，ウマとどれだけ心が通じ合えるものか，新しい実験に入る。

島でクマとウマを飼っているので，人はこう言った。

「きっとウマくない。クマった，シマったと後悔するさ」

しかし私はウマを2頭にし，ウマウマと住みつき，苦マなく，シマいまで快適に過ごせそうである。■　撮影　畑三喜雄

## 漢字のふるさと　31

藤堂明保



驢・騾（ろば・らば）　ロバ・ラバというのは漢語の驢（略字は驴）馬・騾馬を音訳したことばで，北京語では lü-luo と発音する。

まず「驢」から説明しよう。およそ漢語でロまたはリョと発音されたことばは，「粗雑で丈夫だ」という意味を含んでいる。たとえば捕虜の「虜」，それは力づくで荒あらしくぶんどった者だが，それ自体が粗雑にこきつかわれる丈夫な男なのである。次に「爐」（炉），これも粗雑な素焼きのコンロで，火に対して丈夫である。植物のアシのことを盧（芦）というのは，それが粗雑で丈夫な草の代表だからだ。また，字はたいへん縁遠いようだが，「魯鈍なやつだ」という場合の「魯」も，粗雑でがん丈だという意味である。

驢は「馬」＋音符「盧」からなっている。いうまでもなく，粗雑で丈夫な馬の一種という意味である。ロバは寒暑にたえ，粗食に甘んじ，体こそ小さいがたいへん丈夫である。飼うには手がかからず，粗末な扱いをうけても平気である。まさに「魯鈍」なものの代表だから，それをロというのである。

馬と驢とを交配して生まれたのを騾といい，もと驘とも書いた。どちらにせよ，「おとなしく，ひ弱い」という意味である。騾は馬に比べて力は弱いが，柔和であって持久力は抜群である。

驢も騾も，今なお中国では農村の働き手として重宝がられている。■



## ロバ

すべてのウマ類と同様に，ロバ類もウマ科ウマ属に分類されている。ロバ類の特徴は，耳が大きく，たてがみが短く直立し，ひづめ（蹄）の底面が卵形をしており，跗蟬（ふぜん）〔注１〕が前肢（ぜんし）だけにみられることである。

ロバ類は粗食，少食で，長い間水なしで過ごすこともできる。またたいへんに忍耐力の強い性格である。人間は世界のほとんどあらゆる地域に，家畜のロバを移入したが，ノロバ〔野生のロバ〕がいるのは，アジアとアフリカの限られた地域だけである。

飼育種のロバを含めて，現生のロバ類には２種７亜種がある。

### アジアノロバ　*Equus hemionus*

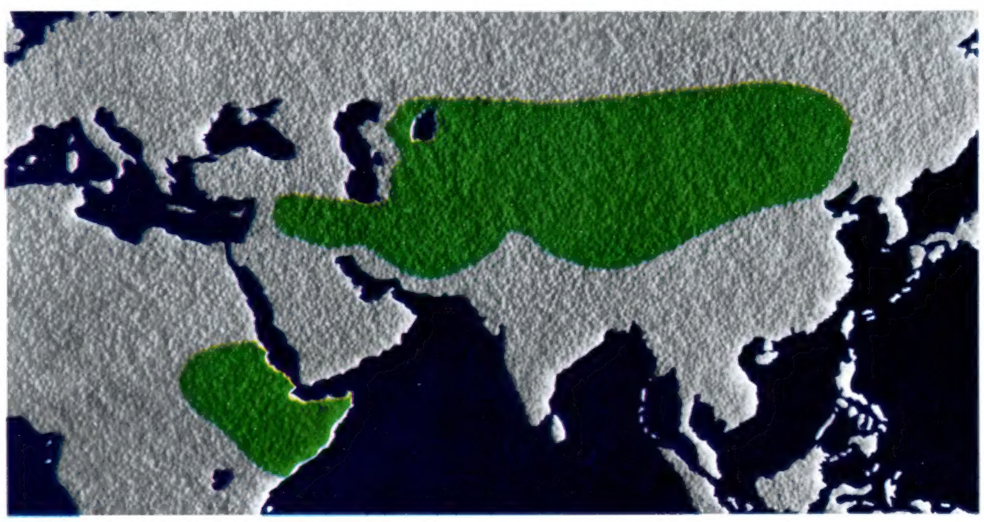
アジアには４亜種のノロバがいるが，いずれもアジアノロバという種に属している。

ウマ科の体形には，プルツェワルスキーウマ（モウコノウマ）に代表されるウマ型と，ヌビアノロバに代表されるロバ型との，２つのタイプがあるが，アジアノロバは以下の点でその中間型を示している。

アジアノロバは，ウマ科としては小型で，肩の高さは1.0メートルから1.3メートルである。頭部は比較的小さいが，耳は大きく，胴は細く，四肢（しし）も細いほうである。毛並みはきめが細かく密生していて，寒さのきびしい地方にすむものでは，冬には著しく厚くなる。毛色は灰黄色で，背には鰻線と呼ばれる黒い帯があり，もう１本の帯が肩のところで十字を描いて交わっているものも多い。

ひづめは，ウマのように大きいが，底面は卵形をしている。

アジアノロバは，人間が盛んに狩りとったので，その数は著しく減ってしまった。どの亜種も絶滅にひんしているといわれ，シリアノロバ *Equus hemionus hemippus* のように，すでに絶滅してしまったものもある。



ロバ。ウマ科ウマ属。
実直そのものといった，おとなしい顔つきだが
頑固なところがあり，気に入らないと
押しても引いても動かないことがある。（上）
撮影　内山　晟

ロバ類の分布。
人間はロバを家畜として世界各国で使っているが
野生種のロバには，２種６亜種があり
アジアとアフリカの限られた地域だけにいて
その生息区域も絶えずせばまりつつある。



## モウコノロバ

*Equus hemionus hemionus*

モウコノロバは，シゲタイまたはクーランとも呼ばれ，外形はむしろウマに似ている。頭はほっそりとしていて，耳はロバ類としては短く14～15センチほどで，四肢（しし）は長く細い。歩く姿は文句なしに優美である。しかしロバ類の仲間である証拠には，たてがみが短く直立し，尾の先にかたい毛のふさがあり，ひづめの底面は卵形である。

背の鰻線は，尾までのびている。毛色は夏には赤褐色だが，冬にはやや灰色を帯び，腹，四肢の先，鼻先は白い。肩の高さは1.15メートルほどで，ときにはこれ以上のものもある。

19世紀までは中央アジア全域に分布していたが，遊牧民に狩りたてられて分布地域はかなり縮小され，現在ではモンゴルの一部にしかいない。この狭い地域はプルツェワルスキーウマの生息地でもあり，両者の外形はよく似ているが，これは生活環境が同じために生じた現象で，祖先が同じわけではない。

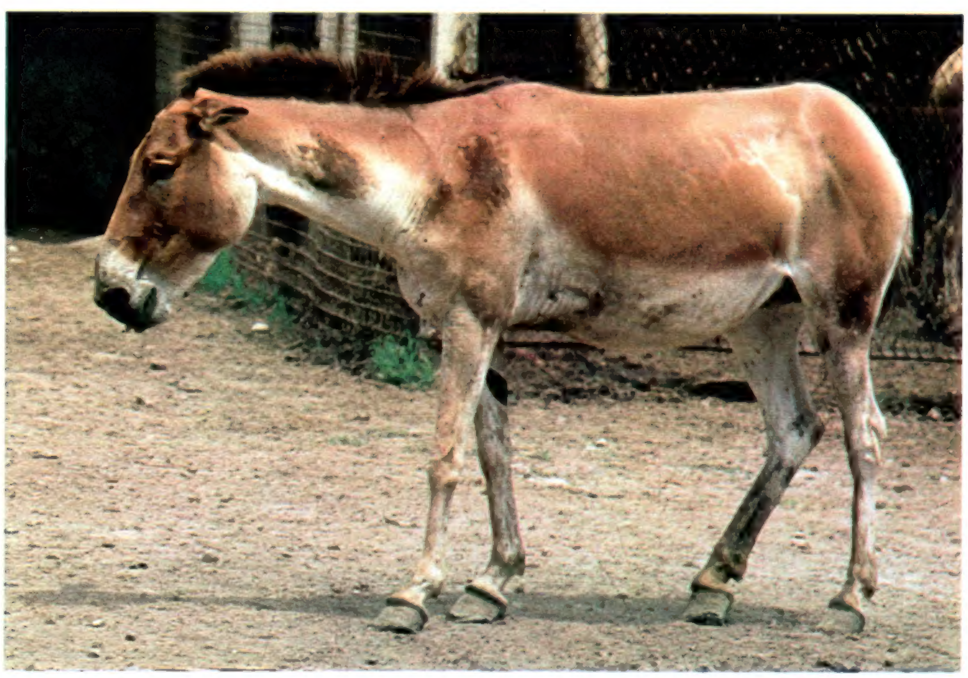
モウコノロバは，1頭の雄と3，4頭の雌からなる，小さな群れをつくって生活している。6月から7月にかけて，この小群がいくつも集まって，大きな群れになる。交尾期は9月で，そのとき雄は非常に嫉妬深くなり，好戦的になる。5月の末か6月のはじめに，子どもが生まれる。

食草が少なく，水もほとんどない土地にすんでいるので，絶えず草を求めて移動するという，放浪生活を送っている。何日も水なしで過ごすこともできる。モウコノロバの好きな食草は，現地の人びとが《バヤリシ》と呼んでいる，とげのある植物である。冬には大地が雪でおおわれ，草がなくなってしまうので，群れは南方に移動し，春までをそこで過ごしている。

モウコノロバは，臆病で小心な動物である。鋭敏な聴覚と視覚により，不意に敵が近づいても遠くからこれを知り，安全なところへ逃げだすことができる。走る速さはほとんどウマに劣らず，最高時速は60キロに達するという。〔注2〕

もっとも恐るべき敵であるオオカミも，モウコノロバとの競走ではかなわないので，まだ幼いもの，老いたもの，傷ついたものがねらわれる。

モウコノロバは，わけなく飼育に順応できるが，生息数が少ないので，動物園でもごくまれにしか見られない。1970年現在の飼育数は，わずか8頭である。



モウコノロバ。ウマ科ウマ属。
跗蟬とか夜目と呼ばれる黒いたこのようなものは
ウマでは前後肢の内側についているが
ロバ類では前肢の内側にだけある。（上）
PH. J-P. VARIN-JACANA

チベットノロバ。ウマ科ウマ属。
キャンとも呼ばれ，チベット，インド
モンゴルなど，アジアの山岳地帯にいる。
写真は中国の北京動物園で飼育中のもの。（下）
撮影　南村志郎

## チベットノロバ

*Equus hemionus kiang*

チベットノロバは，アジアノロバの一亜種で，キャンとも呼ばれる。おもに山地に生息していて，その分布地域は，チベットの海抜6000メートルの高原地帯から，中央アジアでもいちばん寒い地域である，カシミールに及んでいる。

比較的背の高い動物で，肩の高さは1.3メートルに達している。形態的特徴は，ウマ型とロバ型の中間型を示すモウコノロバとくらべると，もっとロバ型に近く，尾はより小さくて尾毛も少ない。頭はより大きく，耳も長い。毛色は褐色で，モウコノロバよりもいっそう黒みが強い。背の鰻線は腰のところで止まり，臀部までは達していない。冬になると毛は長くのびてあらい感じになる。

チベットノロバは非常に足が速く，動作も敏捷である。またきわめてじょうぶで，耐久力が強い。利口で好戦的な性格をもち，大きなひづめを武器にして，オオカミに対しても敢然と防戦するので，孤立しているロバだけが襲われる。

とくに不毛の地方にすんでいるので，チベットノロバは小さな群れをつくって，絶えず新しい草地を求めて移動している。現地の人びとはチベットノロバを捕えて利用し，またこのロバのかわかしたふんを燃料として使っていたという。

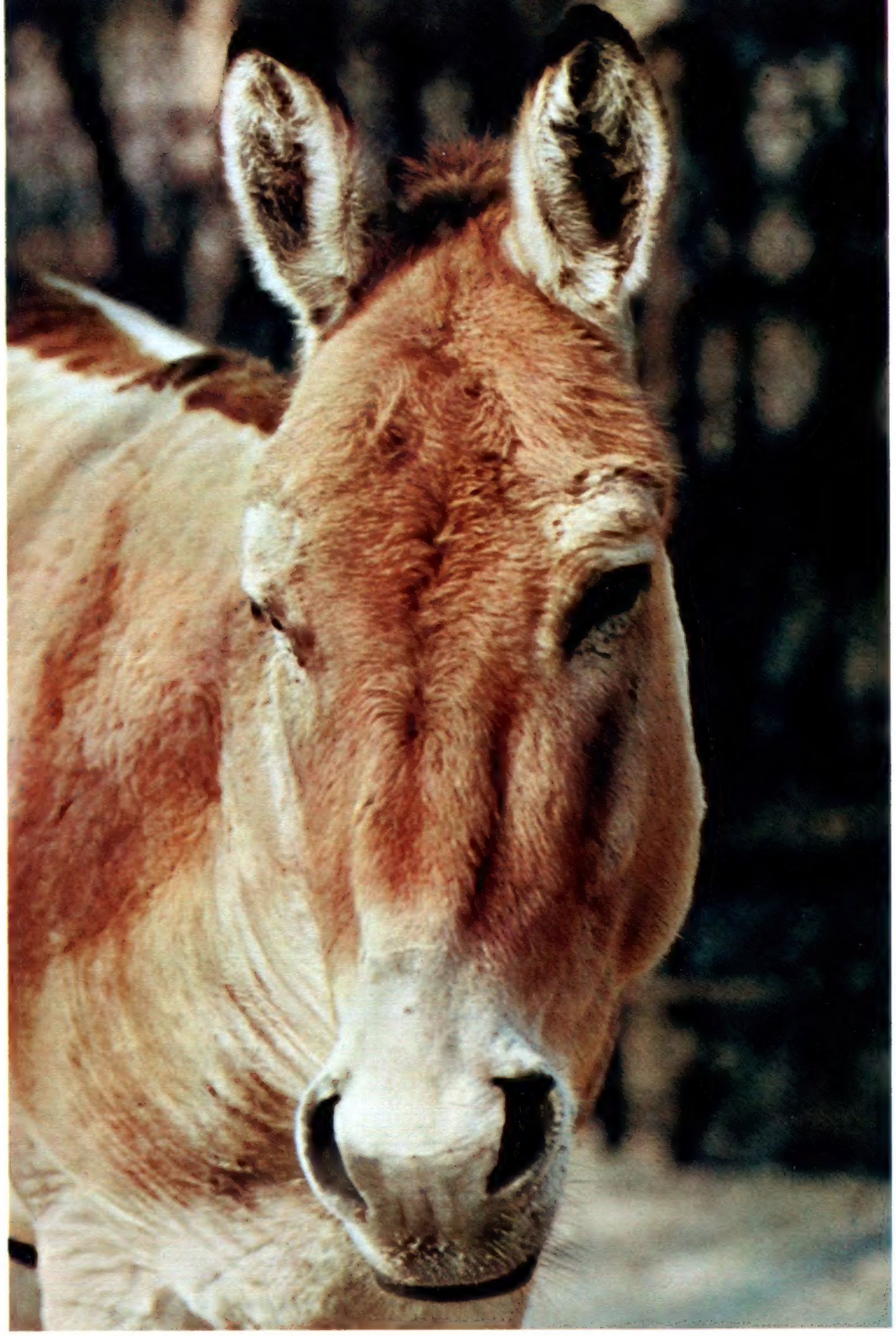
## インドノロバ

*Equus hemionus khur*

かつてインドノロバは，インド北西部の乾燥地帯や西パキスタンなどに，広く分布していた。しかし現在では非常に数が減少して，1962年にはわずか870頭しか残っていないと報告された。その生息地も，インドのグジャラット州の一部の，わずか2600平方キロの区域にすぎないという。

インドノロバは，その地方の家畜ロバよりわずかに大きく，肩の高さは1.1～1.2メートルほどである。毛色は明るい黄色みを帯びた砂色で，短いたてがみは濃いくり色をしており，同じ暗色の鰻線が背すじに沿って尾のつけ根まで走っている。腹側は白っぽい。耳はシマウマのように，短めである。

交尾期は8～10月で，11か月の妊娠（にんしん）期間の後，1子を生む。出産は1年おきになされるという。



## ペルシャノロバ

*Equus hemionus onager*

ペルシャノロバは，オナガーとも呼ばれ，アジアノロバのなかではもっとも小型で，もっとも広く分布し，またもっともロバ型の特徴をそなえた亜種である。

肩の高さが1メートルを越すことはまれで，耳は大きく，尾には長い毛の束があり，ひづめは大きい。きわめて粗食，少食で，飲み水も少量ですみ，塩気のある水でも喜んで飲むといわれるが，これは乾燥した環境に適応している証拠である。

毛の色調は，褐色よりは灰色に近く，ところどころに銀色の光沢がある。背にはふつう鰻線がある。毛はウマの毛のようにすべすべしていて，たてがみは直立しているが，長さ



モウコノロバ。
シケタイ，あるいはクーランとも呼ばれ
ロバ類ではあるが，ウマに近い体形をもつ。
わずかな草と水を求めて流浪の生活を送る。（上）
PH. J. SIX

ペルシャノロバ。ウマ科ウマ属。
オナガーとも呼ばれ，ロバ類ではもっとも小さい
種類で，肩の高さは1メートルを越えない。
しかし他のロバ類に劣らず粗食，少食のうえ
抵抗力も強いといわれる。（下）
PH. PRENZEL-PRESS



10センチほどの柔らかい羊毛状の毛でできている。尾の端にある毛のふさは，25センチ以上もある。

ペルシャノロバの習性は，他のアジアノロバとよく似ているが，あまり群生するのは好まないようである。雌雄はふつう離れて生活していて，1頭の雄の支配下で大集団をつくるのは，一定期間だけである。また雄は，他のロバ類の雄ほどには，嫉妬深くもないし排他的でもないといわれている。

駆ける速さは，その小さいからだにもかかわらず，モウコノロバにひけをとらない。ペルシャノロバの感覚はどれも鋭いので，開けた地形のところでこのロバに近づくことはできない。

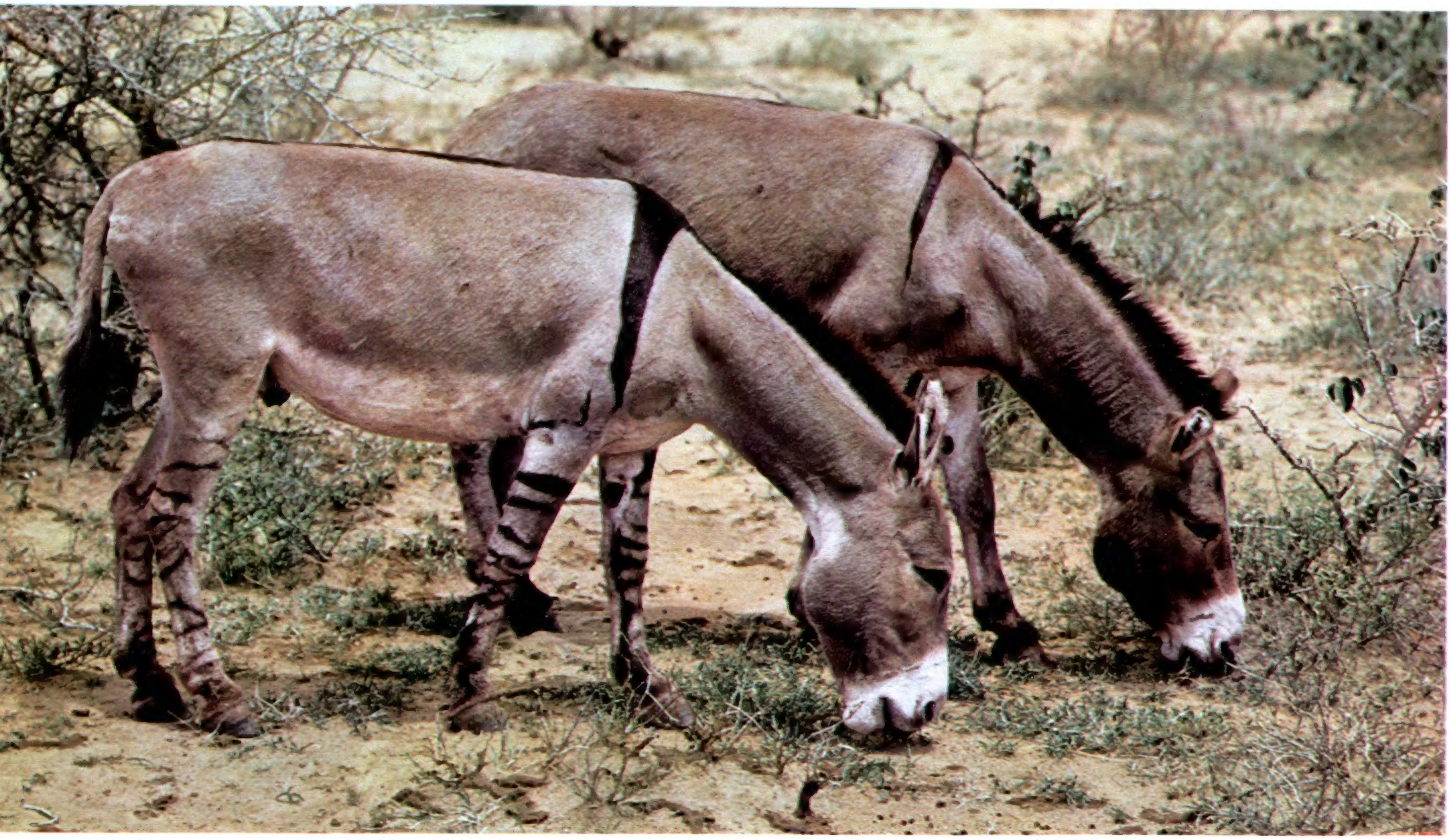
以前はモンゴル西部からシリアまでの広大な地域に，ペルシャノロバはよく見られた。しかし騎馬民族によって狩りつくされ，現在ではいくつかの砂漠地帯に，少数の群れが残るだけである。カスピ海の北東部のバドキール禁猟区のほか，イランの北東部，アフガニスタン北西部にいる。

## アフリカノロバ *Equus asinus*

アフリカには2亜種のノロバがいるが，いずれもアフリカノロバという種に属している。飼育種のロバも，このアフリカノロバの一亜種とされている。

このノロバは，半砂漠地帯での生活にとくに適応した動物である。人間がこのロバを家畜化し，生来の粗食性を利用して，乾燥した，食草の乏しい地域で使う気になったのも，このような自然への適応があったからである。

ラクダと同じように，ロバの体温は気温の変動にともなって，一定の範囲で変動する。人間など，かなり正確に体温を一定に保っていなければならない動物では，気温が上がっても体温が上がらないようにするためには，汗を出し，その蒸発によって熱を奪うしくみになっている。したがって体温を一定に保つためには，多くの水分を必要とする。これに反してロバの体温が変動することは，体内の水分の発散を防ぐので，砂漠地帯では非常にたいせつな意味をもつことになる。〔注3〕



ペルシャノロバ。
野生のロバはどの種類も人間に狩りたてられ絶滅が心配されているが，ペルシャノロバの現在数は約300といわれる。（上）
PH. B. LOSIER

ソマリノロバ。ウマ科ウマ属。
肩のところで十字を描く2本の線と四肢の縞が淡褐色の地に映えて美しい。
アフリカ大陸，ソマリアの北部にすむ。（下）
PH. OKAPIA

またロバは、大量の水をきわめて短時間のうちに飲みこむことができる。この特質によって、水場で過ごす時間が短縮され、それだけ水場で待ち伏せしている大型の肉食獣に襲われる危険も減る。ロバは水をほとんど飲まないとよくいわれるが、まったく水なしで生きられるわけではなく、水を飲むのが早いために見過ごすことが多いのだろう。

ロバの粗食性は、その消化器官の効率がすぐれていることを示している。つまり、わずかの食物を最大限に利用しているのだ。ロバの腸はウマの腸より短いが、直径はウマよりも大きく、そのため食物の腸内移動がおそく、バクテリアによる再消化につごうがよい。

野生状態では、アフリカノロバはアフリカにだけ生息している。特徴としては、耳が大きく、頭部も大きく、ひづめが非常に高くて底面は卵形をしている。附蝉（ふぜん）は前肢（ぜんし）だけにあり、尾の先にかたい毛の束がある。このような体形は、ウマ科の動物のうちではアジアノロバよりもロバ型の特徴をはっきり示しており、そのためにアフリカノロバを《真性ロバ》、アジアノロバを《半ロバ》と呼ぶことがある。

ロバの鳴き声は独特で、《ヒーッ、ビハビハ》といったものである。妊娠（にんしん）期間は12か月ほどで、ウマの11か月より長い。毛の色調は薄い灰色から灰褐色までさまざまで、鼻先と四肢（しし）の内側は白い。頭から尾まで、鰻線と呼ばれる黒い毛の帯が背すじに通っている。肩のところで、もう1本の黒い帯が、十字を描いていることも多い。



ヌビアノロバ。ウマ科ウマ属。
ウマ属のうちでも、もっとも典型的にロバの特徴を示す。耳が長く、たてがみは短く直立し、尾は先端だけに長い毛があり、ひづめが高い。飼育ロバの祖先と考えられている。
PH. LSN

## ヌビアノロバ

### *Equus asinus nubianus*

ヌビアノロバは、アフリカノロバの一亜種である。かつては1頭の雄と15頭ほどの雌からなる群れが、ヌビア地方〔スーダン〕にたくさんすんでいた。現在ではエチオピアとの国境に沿って、アトバラ川に達する丘陵地帯に、わずかに生き残っているだけだといわれるが、その数は不明である。

肩の高さは、雄で1.4メートルほどである。毛色は灰褐色で、腹部、鼻先、四肢の先端では薄い色になっている。2本の黒い毛の帯が、肩のところで直角に交差している。

とくに暑い気候に耐え、著しく粗食である。半砂漠的な生息地に見られる。わずかな植物を食べて生きている。肉食獣に対する唯一の防衛法は、速く走ることである。慎重で臆病なうえ、感覚が鋭いので、ほんのかすかな物音で逃げだす。

皮はじょうぶなため高く評価され、肉は食用とされるので、人間によって盛んに狩りたてられ、生息数は絶えず減りつづけている。現在では法律によって保護されているが、狩猟の対象にはならなくとも、人間によってひとたび環境が破壊されると、野生動物が生きのびることはむずかしい。現在の生息数は不明とされ、絶滅が心配されている。

19世紀の偉大なナチュラリストで、進化論を確立したイギリスのダーウィンは、飼育種のロバはすべてヌビアノロバに由来するとした。しかし飼育種のロバの原種については、ソマリノロバとする説や、単一ではないとする説もある。

## ソマリノロバ

### *Equus asinus somalicus*

ソマリノロバは、アフリカノロバの一亜種である。ヌビアノロバよりはやや小さく、毛は灰色で、肩に十字形の帯はないものもいるが、四肢にシマウマのような黒い横縞がたくさんあるので、他のロバ類とは容易に見分けられる。

ソマリアの北部にすんでいるが、その数があまり減ってきたので、ソマリア政府はこのロバをとることを規制する、きわめてきびしい法律をつくったが、この規制は必ずしも守られず、絶滅が心配されている。











## ロバ(飼育種)

*Equus asinus domesticus*

飼育種のロバには、多くの品種があるが、いずれもアフリカノロバの一亜種として、同一の亜種に属している。おそらくヌビアノロバを祖先として、古代に家畜化され、各地にひろがるうちに他種の血も混じったと考えられているが、異説もある







飼育種のロバの祖先は、ヌビアノロバと
されているが、品種改良のうえでは
他種との交雑も行なわれたものと思われる。

PH. G. ARNAUD　PH. REMY ATLAS PHOTO
PH. LARONS　PH. NAUD AFRIQUE PHOTO
PH. J. SIX　PH. AKE LINDAU　PH. LAUROS





紀元前4000年ごろには，すでに西アジアでロバは家畜として使われ，ウマのいなかった古代エジプトの初期王朝では，労役用に活躍した。のちにローマ帝国によって，ロバは広く普及した。東アジアでも古くから家畜として利用されたが，このうち中国のダイロといわれる大型のロバは，アジアノロバのうち，チベットノロバなどから，改良されたと考えられている。

ウマは活気と熱情に満ちた激しい性格の動物だが，ロバはやさしく，控えめで，情愛深く忍耐強い。ひどい取り扱いにも耐え，やさしく扱う人には愛情を示す。自分の主人をよく見分け，主人が気づくよりも遠くから主人を見つけて，喜びを表わす。しかし頑固なところもあり，気にいらないことがあると人のいうことをきかず，てこでも動かない。またすぐれた記憶力をもっていて，たびたび訪れる場所はよく覚えている。

暑さと乾燥には強いが，寒さと湿気には弱い。そのため赤道に近い地方から温帯にかけて広く使われているが，寒い国々では使われていない。

ウマと同じように，ロバも歯の数は40枚だが，雌ロバではしばしば犬歯がないことがある。歯の摩滅状態を調べると年齢がわかるけれども，ウマほど明らかではない〔注4〕。適切な取り扱いを受け，じゅうぶんにえさを与えられると，25～30年くらい生きる。

ロバはきわめてそまつな食草でも満足する。ウシなら相手にしないような草や干し草でも，ロバにとってはごちそうで，必要とあればとげのある植物でも食べる。また飲み水も少量ですむ。

## 頑固と実直，両面の評価

疲労に対する抵抗力，足どりの確実さ，粗食性が高く買われて，ロバは降雨が少なく起伏の多い土地では，貴重な家畜となっている。

一部は乳用，肉用，乗用にも使われるが，おもに山地で荷物を運ぶのに使われている。ヨーロッパではおもにスペイン，イタリア，ギリシャで，アジアでは中国，インド，アラビアで，またアフリカ北部でも飼われている。アメリカではメキシコ，ブラジルで飼われているが，飼育数はラバのほうが多い。

ロバの品種はそれほど多くはない。品種改良はおもにヨーロッパで進められ，主として大きさで区別されている。肩の高さは，最小のイタリアンで1.0メートル，最大のマジョルカンで1.3メートルほどである。カタロニアンは黒地に白い斑点があって，もっとも優美なロバとされ，ポワトゥは長毛で大型のロ

ロバ　ウマ科ウマ属
このロバらしからぬ長髪のロバは，ポワトゥ種。おもにフランスで飼われている大型品種。（上）
PH. LAUROS

ロバ
かつてヨーロッパでは，ロバの乳の風呂にはいることが長命の秘訣とされ，貴族たちはたくさんの乳用ロバを飼っていたという。（下）
PH. ESA

ロバ
粗食，少食で，水もほとんど飲まないという。実際には，水なしで生きられるわけではないが，大量の水をきわめてすばやく飲みこむので水を飲んでいるところはあまり見かけない。（右）
PH. SILVESTER RAPHO





グレビーシマウマ。はでな模様は，一見したところ目だちやすいようだが，実際には丈の高い草むらのなかや開けた地形においてさえ，すぐれたカムフラージュとなる。とくにシマウマが水を飲みにいく夕暮れどきには，縞模様によってシルエットがこわされ，輪郭がぼけてしまう。
PH. N. MYERS







バである

古くからロバは、頑固、愚鈍の象徴として扱われ、ギリシャ神話や中国の伝説には、人間が魔法にかけられてロバに変えられた話がよく出てくる。またイソップの寓話でも、ロバはつねに愚か者として登場している

しかし他方では、ロバは実直、柔和の象徴としても扱われた。『新約聖書』によれば、キリストはロバに乗ってエルサレムに入城したとされている。またセルバンテスの小説『ドン・キホーテ』においても、忠実な下僕のサンチョは、ロバに乗って旅をした

日本にロバがもたらされたのは、斉明天皇のとき(655〜661年)、百済からはいったものが最初といわれている。その後明治時代に中国から何度か輸入されたが、国内ではあまり用いられなかった。日本がロバを用いたのは、大陸に進出したときに「現地徴発」して軍用としたものである

近年では、日本ではロバはまったく労役に用いられていないといってよく、わずかに遊園地、動物園などで、少数が飼われているにすぎない

## ラバとケッティ

ラバとケッティはともに、ロバとウマのあいだにつくられた種間雑種である。ラバは雄ロバと雌ウマとの交配によって、ケッティは雄ウマと雌ロバとの交配によってできる。一般に雑種は母親によく似ている。ただし鳴き声だけは、ラバは父親のロバに似、ケッティも父親のウマに似ている

ウマとロバは、同じウマ属に属しているが、異なった種のあいだの交雑は、自然状態では起こらない。ウマもロバも、ふつう群れをなして生活していて、交尾期にはそのなかから配偶者を選び、種の異なるものを選ぶことはない。そこで種間雑種をつくるには、なんらかの人為的な手段を講じなければならない。両親のいろいろな性質をあわせて、思いどおりの子どもを得ることはむずかしい

種間雑種では一般にそうだが、ラバもケッティも、ふつう繁殖力をもたない。雄では例外なく子どもをつくる能力を欠いているが、雌ラバではまれに子どもを生むことがある

ラバの外形は、ウマとロバの特徴がかなりよく調和している。からだの大きさは、ウマと同じくらい大きく、骨格もウマと同じ構造をもっている。しかし毛があらく、耳が長いことはロバに似ている

ケッティのほうは、ウマに似て尾は全体にわたって長い毛があり、頭はかなりきゃしゃにできている。しかし背が低く、耳が長く、性格がおっとりしているところは、ロバに似ている。ケッティをつくることはラバをつくることよりもむずかしいので、ラバほどには広く用いられていない

ラバは雑種強勢〔雑種がいずれの親よりもすぐれた性質をもつこと〕によって、人間にとって有益な性質をもつ。粗食、少食の点はロバに劣らず、からだの大きさと力の強さはウマに劣らない。そのうえ、疲労と不順な気候に対する抵抗力も、相当なものである。平衡感覚にもすぐれていて、どんなウマもあえて進まないような急傾斜の小道でも、重い荷を背負って軽々と登る

このような足どりの確かさのために、ラバは山地での輸送手段として、古代から欠くことのできない家畜となっていた。古代ギリシャで使われていた記録があり、『旧約聖書』にはたびたびラバが出てくる。機械化が進むことによって、荷物運搬用の家畜は急激に減ったが、ラバの生産と飼育は今なお盛んに行なわれている

南ヨーロッパの土地のやせた地域、とくにユーゴスラビアのダルマチア地方、イタリアの中部、南部、アドリア海の島々では、ブドウやオリーブの実を運ぶために、ラバが大いに利用されている。このような起伏の多い土地で、ラバは斜面に沿ってすきを引いたり、200キロの荷を背負って1日に25キロを歩くこともできる

アメリカ大陸でも、ラバは家畜として高く評価されている。南アメリカの山岳地帯では、運搬用の家畜として利用され、アメリカ合衆国南部の綿農場でも、盛んに使われている。とくにアメリカ合衆国は、年産500万頭にも達する世界一のラバ生産国でもある

ラバの生産には、ヨーロッパ系の種馬と、アメリカ産のロバが多く用いられている



ロバ
南ヨーロッパの明るい日ざしのなかで
忠実なロバはおとなしく主人を待っている
無気力、愚か者などと悪態をつかれるのも
古来、人びとに親しまれているからだろう。(左)
PH. AARONS

ロバとラバ
草を食べている手前の2頭はロバ
右手奥の少し大がらなのは、雄ロバと雌ウマの
あいだに生まれた雑種、ラバである
顔つきや尾の違いにご注意。(上)
PH. G. AIZATI

ラバ
ウマの力強さとロバの粗食性を兼ねそなえていて
南ヨーロッパの果樹園で、また
アメリカの綿農場で、運搬用に使われる。
200キロの荷を背負って日に25キロを歩く。(下)
PH. J. SIX





## シマウマ

シマウマ類は、ウマ類、ロバ類とともに、ウマ属を構成する。白地に黒褐色の縞が全身にあるので、容易に区別することができる。

いくつかの種、亜種があるが、いずれも強くがっしりした首をもち、たてがみは直立している。頭部はからだにくらべて、かなり大さい。ひづめの形は、ウマとロバの中間で、やや縦に長い円形をし、ロバと同じように、附蟬（ふぜん）は前肢（ぜんし）だけにある。

シマウマの種を見分けるには、縞の並び方の違いを見ればよい。しかし縞模様の形と色は、同じ種のなかでも個体差や地域差が大きいので、正確に分類するためには、解剖学的なデータを見なければならない。

シマウマ類はすべて群生性の動物で、7頭から数十頭の群れをつくって生活している。種の異なったシマウマがいっしょに群れをつくることはなく、同じ地域にすむこともあまりない。シマウマと同じ地域にいるダチョウ、レイヨウ類などは、たよりになる仲間である。とくにダチョウは、警戒心が強く用心深いので、危険をいち早く知らせてくれる。

分布地域は、アフリカ東部、南部の広大なサバンナ〔草原地帯〕である。日中のもっとも暑いときには、数少ない灌木や茂みの陰に、たがいに寄りそって日ざしを避けている。太陽が傾きかけると、シマウマの群れは再び草を食べ始める。夕方になると、1頭の雄の指揮のもとに、水を飲みにいく。ライオンなどの肉食獣は、水場で待ち伏せして獲物をねらうことが多いので、このときが1日のうちでもっとも危険な時間である。

群れの指揮者は、あらゆる方向に気を配り、敵が近づくのを警戒している。少しでも危険のきざしがあると、時速50キロに及ぶギャロップで逃げだす。逃げるときに弱いものをかばう例が、何度も観察されている。

ライオンがシマウマの群れに追いついたときには、すぐに獲物を殺してしまうことが必要だ。さもないとシマウマは、歯やひづめで激しく防戦し、ときにはライオンのほうが敗退することさえある。

アフリカのサバンナでは、シマウマのほか多くの草食獣が生活しているが、草が食いつくされてなくなることはない。〔注5〕

ロバほどには粗食性ではないが、シマウマ





グレビーシマウマとグラントシマウマ。
シマウマ類には6種類ほどあり、それぞれ別に群れをつくるので、このように異なった種が同じ地域で見られるのは珍しい。左手の、縞の目の細かい4頭がグレビーシマウマ。（上）
PH. F. ERIZE

グレビーシマウマ　ウマ科ウマ属。
あっ、いい女がきたぞ！
これはフレーメンといわれる独特な表情で
異性のにおいをかぎつけたときに示される。（下左）
PH. W. LUMMER

シマウマ類の分布。
3種6亜種がいて、どれもアフリカにすむ。
このほかにすでに絶滅した種類もいくつかあり
現生の種も人間によって追いたてられ
分布地域はしだいにせばまっている。





は食草については気むずかしいほうではない。大地が乾燥して草が少なくなると、シマウマをはじめすべての草食獣が水と草を求めて、かなり遠くまで移動する。この移動は、季節によって周期的に行なわれる。

## 訓練すれば車も引く

シマウマの感覚は、よく発達している。どんな物音も聞きのがさず、非常に遠くまで見ることができる。

交尾期には、雄は活発になり、精力的に雌を追う。異性のにおいをかぎつけると、フレーメン〔注6〕という独特の表情を示す。妊娠（にんしん）期間は種によって違い、345日から390日である。子どもは1度に1頭しか生まれない。生まれたばかりの子どもでは、縞は淡褐色をしている。数年のうちに縞の色はだんだんと濃くなって、成獣と同じになる。子どもは生まれた日のうちに、もう母親のあとを追って、はね歩くことができる。母親は非常に注意深く子どもの世話をする。28年くらい生きる。

長い間、シマウマはものに驚きやすく、頑固なので、家畜にはできないと信じられていた。動物園で飼育中のシマウマが、驚いて急に駆けだし、鉄柵にぶっかって首の骨を折り、死ぬという事故が、何度か起こったからである。しかし種によってはごく若いときから訓練すると、ウマやロバと同じように、車を引いたり乗用に使うこともできる。

ウマやロバとの交雑も行なわれている。雄のシマウマと雌のウマとのあいだの子はゼブロースと呼ばれ、雄ウマと雌シマウマの子はホーブラと呼ばれる。これらの種間雑種は、シマウマに特有な眠り病〔ツェツェバエによって媒介されるアフリカの風土病〕に対する抵抗力と、ウマの調教しやすく寒さにも強い性質を兼ねそなえているので、大きな実用的価値をもっている。というのは、今までアフリカでは、眠り病のためにウマを移入することができなかったからである。

シマウマ類には、すでに絶滅した種や亜種も多く、残っているものも非常に数が少なくなっている。現生の種としては、グレビーシマウマ、ヤマシマウマ、バーチェルシマウマの3種がある。

## グレビーシマウマ　*Equus grevyi*

グレビーシマウマは、シマウマ類のうちでもっとも大きく、調和のとれた体形、動作の優美さから、もっとも美しいシマウマといわれている。

名まえの由来は、最初にヨーロッパに持ちこまれたのが、1882年にエチオピアのメネリク皇帝から、フランスのグレビー大統領に贈られたものであったことからきている。

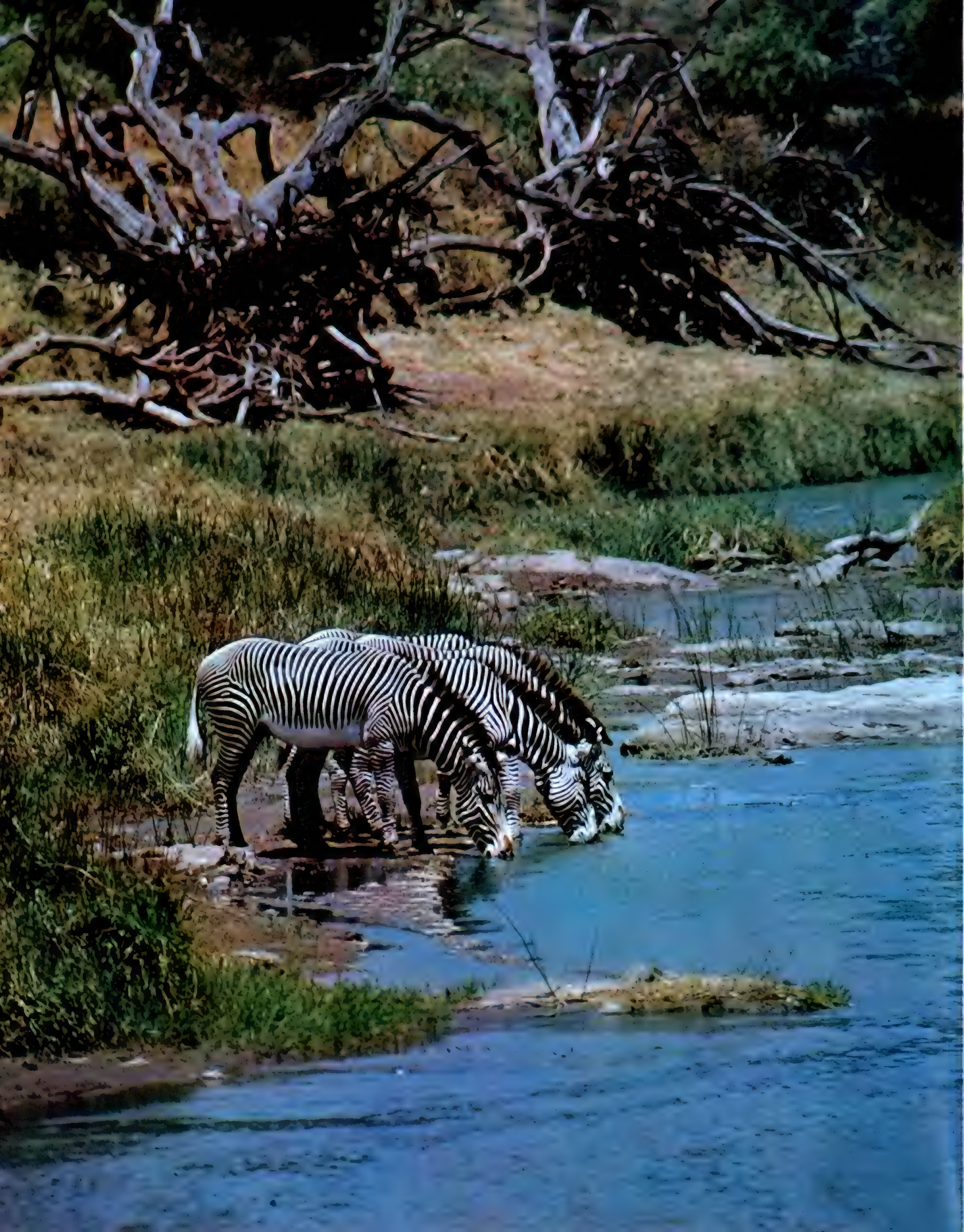
肩の高さは、1.5メートルに達する。地色は明るい薄黄色で、胴では幅3センチ、首では幅8センチほどの縞が、黒く走っている。縞の間隔は、シマウマ類のうちではもっとも細かい。四肢（しし）でも先端まで、細かい環状の縞がある。腹部は白色で縞はなく、鼻



グラントシマウマ　ウマ科ウマ属
水飲み場へ往復するときが、シマウマにとってもっとも危険な時間である。もっともおそろしい敵であるライオンは、水飲み場への道で待ち伏せして狩りをすることが多いからだ。（上中）
PH. PICOU－AFRIQUE PHOTO

グラントシマウマ
後ろから失礼。でもシマウマ類の種の見分けには尾の周辺の縞模様がたよりになるのです。お許しを。（上右）
PH. W. LUMMER

グラントシマウマ
シマウマ類も足は速く，時速50キロとウマに負けない速さで走る。ライオンに襲われても不意打ちでなければ逃げきることができる。（下右）
PH. A. MARGIOCCO





先は黒くなっている。
頭部は細長く、耳も大きい。尾の先には、剛毛の束がついている。ひづめの形はウマ型とロバ型の中間である。
グレビーシマウマは、アフリカ東部の、エチオピア、ソマリア、ケニア北部に分布している。とくに乾燥した、起伏の多い地域に多くすんでいる。小さな群れをなして生活しているが、その構造はあまりよく知られていない。水と食草が少ない地域にすんでいるので、大きな群れをつくることはなく、せいぜい10～30頭がまとまって生活している。
一般にシマウマ類は草を食べるものだが、グレビーシマウマは、木の葉も食べる。また水をあまり飲まない。
交尾期には、雄がきわめて活発になる。ロバと同じように、騒々しく、むしろ粗暴に求愛し、精力的に雌を追いかける。ふだんは雌雄が別に群れをつくっていて、交尾期だけともに生活するものと考えられる。妊娠（にんしん）期間は390日である。

## ヤマシマウマ　*Equus zebra*

ヤマシマウマは、肩の高さが1.3メートルほどのシマウマである。グレビーシマウマとくらべて、耳の幅が狭く、耳の内側には毛が少ない。前肢（ぜんし）の胼胝（ふぜん）はよく発達している。
白い地に黒い縞がついているが、この縞の幅はグレビーシマウマよりも広く、縞の間隔もあらい。腰には背の縞を横切る小さな縞があって、側面の縞と交わっている。臀部では縞が、特徴的な三角形の格子をつくっていて、尾の根もとが三角形の頂点となっている。
生息地域は、アフリカ南部の、南アフリカ共和国北部、アンゴラ、ナミビア〔南西アフリカ〕である。おもに山岳地帯に、小数の群れをつくって生活している。
現地の人びとが、ヤマシマウマの美味な肉と美しい毛皮を求めて容赦なく狩り、とくに鉄砲が持ちこまれてからは文字どおりの乱獲が行なわれたので、その数は衰退の一途をたどった。一部の地域を保護地区に定め、絶滅を防ぐ試みも行なわれたが、なお絶滅が心配されている。



グレビーシマウマ。
シマウマ類のうちではもっとも大きく
肩の高さは1.5メートルにも達する。
細かいサイケな縞模様は美しく
なるほど目くらましに役だちそうだ（左）
PH. MYERS-AFRIQUE PHOTO

グレビーシマウマ
見たところ温和な顔つきだが、性格は激しい。
動物園などでは、急に走りだして柵に激突し、
あえない最期をとげることがある[illegible]
PH. OKAPIA

ヤマシマウマ　ウマ科ウマ属。
アフリカ南部の山地にすむシマウマ。
人間に狩りたてられて著しく減り、
今では一部の地域で保護動物とされている[illegible]
PH. A. P. ROSSI









チャップマンシマウマ
アフリカ南部に広く分布している亜種で
日本の動物園ではもっとも多いシマウマ
縞模様がきわめてはっきりしている。（左）
*PH. I. DRAGESCO / ATLAS PHOTO*

[illegible]シマウマ
ふつう10数頭の雌雄が、いっしょに群れをつくり
交尾期だけはつがいで暮らすので
群れは一時的に解散される。（右上）
*PH. N. MYERS / PHOTO RESEARCHERS*

[illegible]シマウマ
〔一〕時ではけ[illegible]ける[illegible]は強く
ライオンに追いつめられると、かみつき、け[illegible]
[illegible]は[illegible]群を[illegible]する。（右下）
*PH. I. DRAGESCO / ATLAS PHOTO*





## バーチェルシマウマ

*Equus burchelli*

バーチェルシマウマには多くの亜種があったが，現在では次の3亜種が残っている。

**クラントシマウマ** *Equus burchelli bohmi*　アフリカ南部に広く分布している。地色はくすんだ白色から薄い黄色で，縞は非常にはっきりしており，四肢の先端まで縞がある。

肩の高さは130センチに達し，グレビーシマウマとくらべると，外形はウマにより近く，胴は太く，鼻先は短く，首は細い。日本の動

生まれたばかりの子どもの縞は褐色だが，だんだんと色が濃くなり，数年のうちに成獣と同じ黒い色になる（下）
PH. N. MYERS PHOTO RESEARCHERS

42—19





チャップマンシマウマ　ウマ科ウマ属。
縞と縞の間に、薄いかげ縞があるのが特徴。
地色はクリーム色で
四肢の縞はひざくらいまでしかない。（上）
*PH. KLAGES-ATLAS PHOTO*

チャップマンシマウマ。
アフリカのサバンナ地帯には、シマウマ以外にも
さまざまな草食動物が生活している。
水場にはたくさんの動物が集まってくる。（下）
*PH. J. BURTON PHOTO RESEARCHERS*

物園でもっとも多くみられるシマウマである。

**チャップマンシマウマ**　*Equus burchelli chapmani*。南アフリカ共和国南部、ベチュアナランド、ナミビア〔南西アフリカ〕、アンゴラ南部にすんでいる。外形はグラントシマウマによく似ているが、地の毛色はより濃く、縞と縞の間には薄いかげ縞があって、四肢(しし)では先まで縞がついていることはめったにない。

**セロウスシマウマ** *Equus burchelli selousi*。モザンビーク、ローデシア、ニアサランドにすんでいる。地の毛色は黄白色，縞は黒褐色(こくかっしょく)である。

縞はチャップマンシマウマよりたくさんあって、四肢でも先端まで縞がついている。ごくまれにかげ縞のあるものがいる。

なお、このほかにすでに絶滅したシマウマとして、**クアッカ**　*Equus quagga* がある。これは小型のシマウマで、縞はからだの前半部だけにある種類だったが，1860年にはすでに絶滅していた。

# 絶滅寸前の野生ロバ



増井光子

野生のロバは，アジア地方に1種4亜種，アフリカに1種2亜種が現存している。そしてアフリカ産のものは，真正のロバに属するが，アジア産のものは，ロバとウマの中間型を示すものとされている。ウマとロバは一見似ているが，よく見るといくつかの相違点がある。

アジアノロバは，四肢（しし）が細く，ひづめの形などはロバに似ているが，頭骨，腰椎（ようつい）骨，仙骨（せんこつ）などの形は，むしろウマに似ているといわれる。

これら野生のロバたちは，かつては広い地域に分布していたが，現在ではそのいずれもがきわめて減少し，分布地域もせばまってきている。

スイスに本部を置く国際自然保護連合(I.U.C.N.)では，絶滅にひんしている277種の哺乳類を，早急に保護の手が必要な動物としてリストアップし，1966年にレッドデータブック（Red Data Book）として世に問うた。このリストは，赤，緑，白の3色のカードから成っており，赤色のカードには，まさしく「直ちに自然破壊をストップさせよ。この動物に救いの手を！」と呼びかける，切迫した状態に追いこまれた動物たちがあげられている。

野生のロバは，このリストがはじめて発表された1966年には，すでに現存する6亜種のすべてがリストにあげられ，またシリアノロバはすでに滅亡したと考えられた。とくにアフリカ産のものが減少が著しく，ヌビアノロバは絶滅寸前の赤色カードで，1966年にまだ白色カードだったソマリノロバも，1968年には赤色カードの仲間入りをした。

これら野生ロバの滅亡の原因は，いろいろ考えられるだろうが，人間による乱獲と，無思慮な環境の破壊が，その大きな原因であることはいなめない。

ノロバたちは，一般に乾燥したステップ地帯や荒れ地にすみ，わずかな植物と水を求めて生活している。そういった荒蕪地にも人間が進出し，それに伴う家畜の導入が行なわれると，ノロバたちは乏しい草と水を無遠慮な家畜に奪われることによって，著しく生活環境をせばめられてしまうことになる。

さらには火器の発達も，滅亡に輪をかけた。ノロバたちは，旧式の狩猟具や肉食獣からはじゅうぶんのがれ得るだけのスピードでステップを駆けまわれたが，鉄砲が発明され，進歩し，さらに自動車に乗って撃つことまで出現するに及んで，多くのものが狩りとられた。

狩りの目的は，肉と皮を利用する以外にも，脂肪が結核の治療に効果があるとか（ソマリノロバ），精巣を媚薬とする（インドノロバ）などの，迷信によることも多かった。またペルシャノロバでは若いものを捕えて貴族の乗用にしたり，ソマリノロバのように，戦争のときに軍隊が盛んにとってしまった例もある。

インドノロバでは，ズーラ病というウマの伝染病の流行によっても減少した。ヌビアノロバでは，無計画に家畜を導入したため，野生ロバと家畜ロバとのあいだに雑種が生じ，群れの純血が失われて，ついには家畜ロバのなかに吸収されてしまった例もある。

**ノロバの生存数**（International Zoo Yearbook 1970.より）

| 亜種名 | 自然状態 | 飼育 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 国 | 動物園数 | 雄 | 雌 | 不明 | 計 |
| モウコノロバ | 数千 | ソ連 | 11 | 21 | 21 | 0 | 42 |
| | | ドイツ | 2 | 4 | 8 | 0 | 12 |
| | | ポーランド | 1 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| | | チェコスロバキア | 1 | 2 | 3 | 0 | 5 |
| | | イギリス | 1 | 2 | 2 | 0 | 4 |
| | | 計 | 16 | 30 | 35 | 0 | 65 |
| チベットノロバ | 不明 | ソ連 | 2 | 1 | 4 | 0 | 5 |
| | | チェコスロバキア | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | | イタリア | 1 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| | | 計 | 4 | 3 | 5 | 0 | 8 |
| インドノロバ | 870 | インド | 3 | 5 | 4 | 0 | 9 |
| ペルシャノロバ | 約300 | オランダ | 3 | 3 | 4 | 0 | 7 |
| | | ベルギー | 1 | 2 | 1 | 0 | 3 |
| | | スペイン | 1 | 2 | 1 | 0 | 3 |
| | | ドイツ | 11 | 18 | 21 | 0 | 39 |
| | | アメリカ合衆国 | 7 | 14 | 17 | 0 | 31 |
| | | イギリス | 3 | 5 | 4 | 2 | 11 |
| | | カナダ | 2 | 5 | 5 | 0 | 10 |
| | | スウェーデン | 1 | 2 | 2 | 0 | 4 |
| | | ポーランド | 2 | 3 | 3 | 0 | 6 |
| | | チェコスロバキア | 1 | 1 | 2 | 0 | 3 |
| | | イタリア | 2 | 2 | 3 | 0 | 5 |
| | | フランス | 1 | 4 | 2 | 0 | 6 |
| | | イラン | 1 | 2 | 1 | 0 | 3 |
| | | イスラエル | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| | | 計 | 37 | 63 | 67 | 2 | 132 |
| シリアノロバ | 絶滅 | なし | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ヌビアノロバ | 不明 | ドイツ | 2 | 4 | 2 | 0 | 6 |
| | | アメリカ合衆国 | 3 | 4 | 7 | 0 | 11 |
| | | オーストラリア | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | | 計 | 6 | 9 | 9 | 0 | 18 |
| ソマリノロバ | 数百 | アメリカ合衆国 | 1 | 2 | 3 | 0 | 5 |

現在，野生ロバの生息数は，表のようにさびしい状態である。動物園でもこれら希少動物の保護増殖に力を入れ，飼育ノロバの国際登録も計画されているが，その頭数は微々たるものである。

それにつけてもノロバの滅亡史は，新しい環境へ無計画に動物を導入すると，もとからそこに生活していた野生動物にどのような破滅をもたらすかを，如実に示しているのではないだろうか。自然と環境を考えるうえで，われわれはいっそう注意深くあらねばならぬことを痛感するのは，筆者だけではないと考える。■

## カラーページ注

〔注1〕 **附蟬**　ウマ属の四肢（しし）の内側にある，縦4,5センチ，横2センチほどのかたいたこのようなものをいう。ウマでは前後肢ともにあるが，ロバやシマウマでは前肢のみにある。一般に夜目（よめ）とか，セミがくっついているようなところから，附蟬（ふぜん）とも呼ばれる。

〔注2〕 **モウコノロバのスピード**　ロバの足も，ウマに負けずなかなか速い。1920年に，モウコノロバの群れを自動車で25キロほど追跡し，その速度をはかった例では，最高時速54キロに達し，なかの1頭の雄は，全距離を平均時速48キロで走ったという。このスピードと耐久力は競走馬に匹敵するものである。また別の例では，100メートルを5.5秒で走った記録もあり，これも競走馬の5.3秒にくらべて，それほど劣らない。

〔注3〕 **ロバの耐渇性**　野生のロバは，中央アジアのステップや北アフリカの乾燥地帯にすんでいるので，すぐれた水分節約能力をもっている。

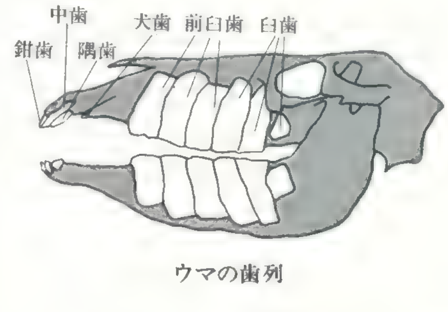
人間は炎天下で体重の12パーセントの水分を失うと死の危険性があるが，ロバはラクダと同様に，体重の25パーセントまでの水分の喪失に耐えられる。また排泄される尿も，濃縮されて尿素の多いものである。

しかし，ロバはラクダほどには，体温の変動に耐えられず（ラクダは夜間の体温は34度に下降し，日中は40.6度に達する），汗をかいたりして体温調節をしなければならないので，2，3日に1度は水を飲まねばならない。

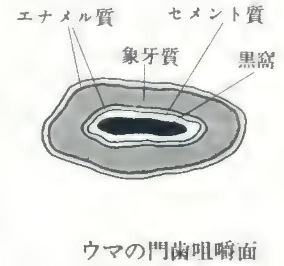
それでもロバはたいへんすばやく水を飲み，わずか数分のうちに，失った水分をとりもどせるだけ飲むことができるといわれる。つまり水たまりにちょっと口をつけただけで，じゅうぶんな水を飲めるということになり，遠くから見ていると，まったく水を飲まずにいると思われるほどである。

〔注4〕 **歯による年齢鑑定**　動物の年齢を鑑定することは，困難な場合が多い

――→ *




ウマの歯列




ウマの門歯咀嚼面

# 芸道一筋のタレント馬



〝ジュラク〟の名を一躍有名にした『風と共に去りぬ』の舞台

世はまさに〝タレント時代〟。舞台に，映画に，ブラウン管に，新人・旧人とりまぜて登場するタレントは数知れない。

恥も外聞も投げ捨てた必死の売り込みにもかかわらず，あえなく消えていく者も少なくないようだが，人気を集め，かっさいを拍する「スター」「名優」の幅もひろがってきた。

ことに最近では，その「スター」「名優」が，必ずしもヒトであるとは限らなくなった。しかも，その演技が人間離れならぬ〝動物離れ〟しているにいたっては，まさに芸達者なタレント並み。

その動物タレントの代表としてここに登場するのは，奇蹄目のウマなのである。名まえは「第1ジュラク」号。まずはその履歴書から拝見しよう。

昭和34年春，北海道社台牧場生まれ。当年とって12歳（人間にしてみると40代中ごろ）。トロッター系の雌で未婚。4歳まで学習院大学の馬術部に所属し，足のケガがもとで，その後転々と身の置き場所をかえる。5歳のとき，今の主人である草下虎之助さん（50歳）に素質を認められて現在にいたる。

体重約500キロ，体高160センチ。毛質は鹿毛。性格温順にして記憶力抜群。そして職業はタレント，というぐあい。

紹介はこのぐらいにして，うわさに聞く彼女の名演技ぶりを再現してみよう。

## 背景に合わせて，舞台を〝疾走〟

ジュラク嬢が一躍有名になったのは，なんといっても5年前の帝劇公演『風と共に去りぬ』の舞台であろう。

劇は，この長大な作品の前篇のクライマックス。ヒロインが燃え落ちる町から馬車に乗って脱出するスペクタクルシーン。背景はスクリーンに写しだされたまっかな火炎，そしてくずれ落ちる町並みの大音響とわきあがる煙。その情景のなかを懸命に〝疾駆〟する馬車。

文字で書けばこうなるのであるが，そこは狭い舞台でのこと。スクリーンに映る背景を動かして，実際には動いていない馬車を走っているように見せかけているわけだ。つまり，ウマに走るときと同じ要領で足踏みさせているのである。しかし，この「足わざ」だけでは迫力が出ない。満身に力を入れ，〝表情豊か〟に全力疾走の〝マネ〟をしなければいけないのだ。おまけに，舞台の進行に合わせて「駆け足」を始め，表情をつくり，そして下手へと退場しなくてはならない。この間およそ8分20秒。劇の緊迫感のすべてが，このジュラク嬢の演技にかかっているともいえる。

劇が終わってのカーテンコールがまたおもしろい。満場の拍手が，この〝名優〟に向けられる。すると心得たもので，それに応えるかのように〝歓喜〟のイナナキをあげ，満足感にひたったと伝えられている。

「あの娘とわたしは相思相愛の仲なの」と語るのは，この舞台でヒロインを演じた那智わたるさん。

「初対面のときは，目が澄んだ利口そうなウマだと思ってましたが，相性がよかったのか，毎日顔を見合わせていたら，すごく情が移っちゃってね。スキンシップを欠かすと，すぐムクレるのよ。千秋楽のときなんか，なんとなく〝別れ〟を察したのか，すごく悲しがってたの……」と〝惚れ込み〟の弁をしゃべりまくるのである。

那智さんとの仲はともかく，この『風と共に去りぬ』での〝名演〟以来，人気は沸騰するばかり。押しも押されもせぬ「名優」扱い。出演する舞台のプログラムには，主演者と並んで名まえが登場するようにもなった。

ここで，ジュラク嬢の主人である草下さんに登場してもらおう。

「なにしろ芸達者というか，芸熱心で

## カラーページ注

＊→

が，もっとも有力な手がかりの1つは，歯の摩滅状態を調べて年齢を推定することである。なかでもウマでは，門歯の咀嚼面にエナメル質の楕円形のひだがあって，それが摩滅するにしたがい特徴的な所見があらわれる。このようにしてウマでは，かなり正確に年齢が判定できるため，欧米では贈られたウマの歯をすぐに調べることは，失礼なことだとされているくらいである。ウマの歯式は，門歯3／3，犬歯1／1，前臼歯（きゅうし）3（4）／3，臼歯3／3である。ただし雌にはふつう犬歯ははえない。

ウマの門歯の咀嚼面は，もともと横楕円形をしていて，ほぼまん中に黒窩（こくか）と呼ばれる，黒色の部分がある。これはエナメル質のひだの間に食物のかすがつまって，変色したものである。歯が摩滅すると黒窩は次々に消失し，さらに咀嚼面が変形する。ウマの門歯は，内側から順に，第1門歯を鉗歯（かんし），第2門歯を中歯，第3門歯を隅歯（ぐうし）と呼ぶことがある。年齢による歯の変化は，ほぼ次のとおりである。

2歳半　鉗歯がはえかわる
3歳半　中歯がはえかわる
4歳半　隅歯がはえかわる
6歳　下あごの鉗歯の黒窩消失
7歳　下あごの中歯の黒窩消失
8歳　下あごの隅歯の黒窩消失
9歳　上あごの鉗歯の黒窩消失
10歳　上あごの中歯の黒窩消失
11歳　上あごの隅歯の黒窩消失
11～14歳　咀嚼面は円形に近くなる
15～18歳　咀嚼面は三角形に近くなる
18歳～　咀嚼面は縦楕円形になる

〔注5〕**サバンナの草と草食動物**　アフリカのサバンナ地域には，日本でもおなじみのエノコログサやオヒシバなど，イネ科の植物がおい茂っており，たくさんの草食動物がこれを食べて生活している。多数の動物たちは，草を根こそぎ食べつくしてしまうように思われるが，実際には巧みに自分たちに合った生活環境に分散し，また採食の方法も異なるために，草と草食動物とのあいだには，うまくバランスがとれている。

たとえばアフリカではもっともポピュラーな3種のガゼルは，少しずつすみかを異にしている。インパラはやぶのある地域にすみ，トムソンガゼルは草原に，一部はやぶの周辺でインパラと混在し，グラントガゼルは草原にもいるが，草のまばらな荒れ地にもすんでいる。

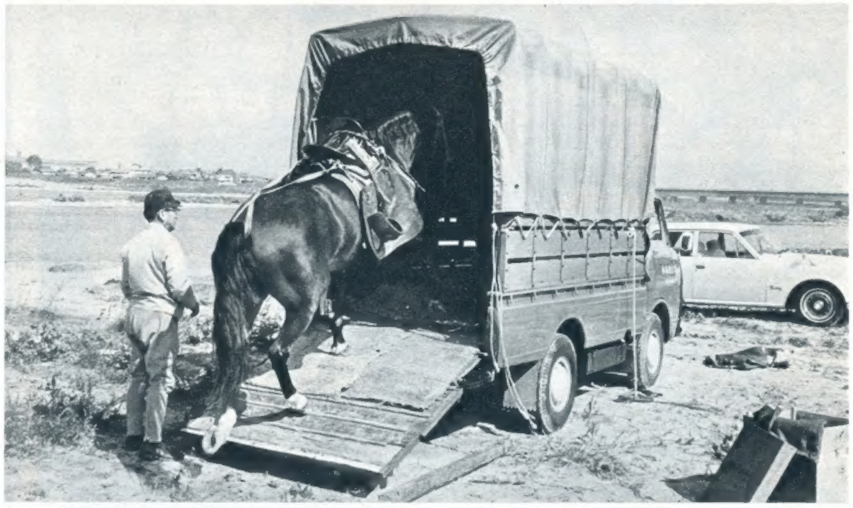
また同じ草食動物といっても，クロサイは低木の葉を食べ，キリンは高木の葉を食べる。ヌーは10センチくらいにのびた草を食べ，シマウマは成長しきった草を食べ，トピというレイヨウは枯れかかった草を食べる。このように動物の種類によって，えさは少しずつ異なる。そして動物たちは，ほとんどの草が枯れてしまう乾期には，草を求めて移動する。

このように自然界では，草と草食動物とのあいだには一定のバランスが保たれているが，ここに家畜を無計画に導入するとこのバランスはくずれてしまう。

〔注6〕**フレーメン**　動物が仲間のにおいをかいだとき，とくに雄が雌の排泄物のにおいをかいだときにあらわされる表情である。上くちびるをめくりあげ，歯をむきだし，頭をややもちあげ，目を細めて，恍惚とした表情になる。

このフレーメンは，くちびるの運動筋の発達のよいウマ属でよく認められるが，バーバリシープやトラ，ライオンなどにも認められる。トラやライオンでは，上くちびるが上方に反転するかわりに，上にもちあげられ，鼻すじにしわをよせ，舌が少し突きだされる。怒りの表情にいくぶん似ているが，目が細められ，目つきも柔和なので容易に区別される。■　（増井光子）





その場のふんい気をすぐに察知して〝演技〟する能力をもっている

きょうの仕事も無事終わった　帰宅前に〝ひと風呂浴びたい〟という心境か……（多摩川原ロケから）

ね。芝居をやるために生まれてきたようなもんです。むずかしい演技も，すぐツボを心得るんですよ。それに記憶力がいいから，絶対に演技を忘れないし，かといって，一度その劇の公演期間が終わると，それまでのことは忘れて，次の出し物の稽古に夢中になるという切りかえもできるんですよ。えっ？　糞ですか。舞台では絶対にしないで，楽屋までがまんしてきますね」

「出演料はですね，1日1万円ですが，諸経費込みで3万円ぐらいでしょうか」

**大好きな，ロケ地でのお弁当**

ある初冬の日，映画のロケがあるというので，彼女の1日を追跡してみることにした。

○5時30分――厩舎へいっても，まだ横になっておねんね。仕事があるので，かわいそうだが起こす。

○6時――まだねむそうな彼女をなだめすかして，近所を散歩。

○6時30分――いつもより30分早い朝食。内容は乾草・エンバク・フスマ・塩・カルシウム，それにきょうはだいじな仕事なので，ニンニクの精力剤を少々。

○7時――彼女専用の「自家用車」に乗って出発。

○8時――ロケ地の多摩川原に到着。メーキャップがわりに毛のブラッシングとひづめの手入れ。

○8時30分――撮影開始。きょうの仕事は三船プロの時代劇。宍戸錠さんの扮する武士を背に乗せて，敵に斬り込むシーン。

前方から駆けてきて，カメラの前でポーズをつくり，宍戸さんを降ろすや，カッコよく後方へと消えていく。

○12時――ロケ班の昼食時間。ジュラク嬢も昼食をとることになる。しかし，自分のえさには興味なく，さかんに出演者，スタッフの弁当をねだりにいく。それもそのはず，彼女の大好物は寿司とハンバーガーとか。

○13時30分――好物はもらえたし，自分の出演シーンもすでに終わっているので，また「自家用車」に乗ってご帰還。

○15時――家に到着。やや睡眠不足のせいか，新しく取り替えられた寝ワラの上で，しばし昼寝。

○19時――朝とほぼ同じ献立の夕食。

○20時30分――就寝。

ジュラク嬢の夢枕には，きっとまだ見ぬ恋人でも立っているのだろう。それとも明日の演技のことなのか……。

このヒトを食った〝千両役者〟，いずれにせよ，これからが〝芸〟に円熟みの加わる年ごろである。今後のジュラク嬢に期待しよう。■　（本誌・大坪記者）

山路でのであい　4

# カモシカ

文とえ　串田孫一

私はこれと言って特別の意見があるわけではないが，はっきりとしている場合には動植物の名前を漢字で書きたい気持がある。それは自分の文章上の理由であって，片仮名書きに反対するのではない。

以前，カモシカを「羚羊」と書いていた。しかし今泉吉典氏の御意見により，「羚羊」はレイヨウであって，カモシカとは別だと知ってから使わないようにしている。漢字で書けば「氈鹿」になるが，これはカモシカとは読みにくそうなのでここでは片仮名にした。

そのカモシカには，40何年間かの山歩きで何度も出会った。谷川岳で見かけた回数が一番多いかも知れない。清水トンネル開通以前は勿論，それ以後も今ほど人の行かないうちは，東面の岩場には多かったと思う。熊などに追われた時に，岩壁のせまいテラスに逃げるのがカモシカにとっては一番いい方法のようである。

1934年の初冬，私は3人で，マチガ沢と一ノ倉沢とのあいだの岩尾根を登った。東尾根とかシンセン尾根と呼んでいるところで，今では自然に道がついてしまったほど大ぜい登るそうだが，その頃は実際に登るまでに何回か双眼鏡をもってスケッチに行き，大体登路の見当がついてから登るものだった。

ところが新雪が来てしまい，この岩尾根としては最悪の条件になった。予定していたよりは4倍5倍の時間がかかり，疲れもひどかった。その上，薄暗くなってから友人は足を滑らせ，ザイルでとめたが手に傷を負い，そこで夜あかしをした。

この事故のため，私は友人を自分の力でとめられず，咄嗟に一ノ倉側に飛び下りたが，私の姿に驚いたカモシカが，僅か10センチもないほどの足場をまことに器用に使って，絶壁を斜めに駈けて行った。友人をとめられた私は，自分が岩尾根から殆どぶらさがっている状態でいるのも忘れて，その姿に見とれていた。

決して器用そうには見えないずんぐりしたカモシカが，躊うこともなく厳しい岩場を走って行くのが羨ましかった。

その夜は夜半から霙が降り出し，それが雪に変ったが，1本の蠟燭で時々暖をとりながら蹲って朝を待った。ザイルでめいめいの体を岩にくくりつけてはいたが，そのカモシカの事もなげな動きを見てから，自分たちが，人間の棲む領域からはみだしたところで，何とも不自然なことをしているように思われて仕方がなかった。

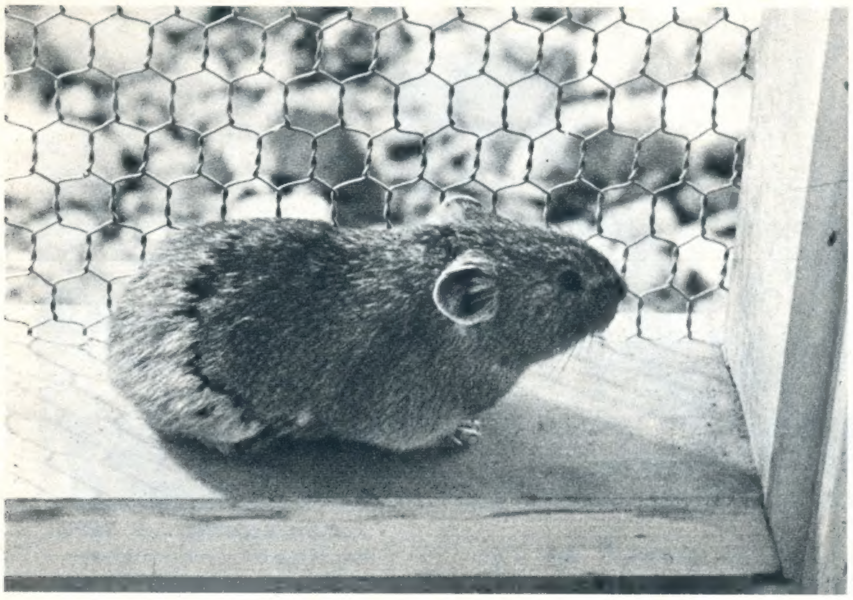


それ以来，山の中で，例えば急流であるとか，傾斜のはげしい岩場であるとか，雪の急斜面にぶつかって躊うような時，カモシカであったら，そこを登れるか登れないかの判断は一瞬にしてつけられるだろうにと思った。

数年前，岩場では絶対に自信があると思って羨んでいたカモシカが，同じ谷川岳の南面の谷で，雪崩に流されたのか，それとも自分で足を滑らせたのか，ひどい負傷をして動けなくなっているのに出会ったと，知人が知らせて来た。谷川温泉まで何とか連れて来て預けてあるが，どうしたらいいだろうかと，私は意見を求められたが，名案は浮かばなかった。その人は現場で，流れの岸にしょんぼりと立ちすくんでいるカモシカの写真を見せてくれたが，カモシカも事故を起こすことのある岩場を，人間が絶対安全の自信で登ろうとするのは，大それた思いあがりであると考えた。

と同時に，この恐ろしい自信過剰で人類は生きているのかとも考えた。■

（哲学者）



# 飼育自慢 9 （最終回）

## ナキウサギ

おびひろ動物園

ナキウサギはアラスカ，北アメリカ山岳地帯およびヒマラヤ，モンゴルからアジア大陸北部にかけて生息し，高地もしくは寒冷地のガレ場に，氷河時代の残存種としてひっそり生存している。

日本には北海道にのみ生息し，1928年北見の置戸で最初に発見され，大雪山系，日高山系，然別湖周辺にも生息している。体形は成体で体長約15センチ，体重約150グラム，耳は幅広く短い丸型で，尾は外見上目だたず，被毛は灰褐色または茶褐色，足のうらは密毛でおおわれ岩石や雪氷にすべり止めの役目をもっている。

ナキウサギは名まえのごとく，金属性の鋭い特徴的な声で，10回から15回ぐらい連続して発声するが，12回を越えると鳴く間隔が長くなり，苦しそうな声になる。この連続発声は4月から7月下旬にかけてが盛んで，それ以外は，1声もしくは2,3声のみという季節的な変化がある。

岩石地帯の岩のすきまを利用して生活し，高山性植物を常食にしており，秋になると越冬用飼料として多量の植物の葉を岩陰に乾燥させて貯蔵する。また，ナキウサギには食糞現象がみられ，球状の通常便とは別に，糸状で粘着性に富んだ盲腸糞と言われる糞を乾燥させ，植物の乾燥させたものに混入して貯蔵し，冬期間の栄養補給源としているといわれている。

おびひろ動物園では，昭和45年7月に3度めのナキウサギ飼育を試み，過去に例を見ない長期間の飼育により，生態観察から貴重な資料を記録した。夏期の高温，冬期の低温にも特別な対策を立てずに生活環境に順応させ，1年6か月を経過してなお健在である。

飼育下でのえさはリンゴ，バナナ，クローバー，ハギの葉，ミカン，レーズンなどで，そのいずれもよく好み，とくにバナナは大好物で美食家でもある。飼育下でも1年めの秋には貯食行為がおう盛に見られたが，なぜか2年めの今秋は貯食しない。■　（技師・小柳慶悟）

### 原稿募集

本誌『私たちの仲間』では，次のような原稿，写真を募集しています。

**☆仲間のひろば　☆ペット相談室　☆読者の研究　☆動物写真　☆その他**

原稿の長さは原則として400字詰原稿用紙2枚以内。住所，氏名，年齢，職業，電話番号を明記してください。

採用分には，薄謝または記念品を進呈します。

また，採否のお問い合わせにもお答えいたしかねますのでご了承ください。

〔あて先〕　東京都千代田区有楽町2の3
朝日新聞社「世界動物百科」編集部
『私たちの仲間』係

〈お知らせ〉

1月号の発売日は年末，年始の関係で次のようになります。ご了承ください。

**第43号**（1月2・9日号）12月22日発売
**第44号**（1月16・23日号）1月12日発売
**第45号**（1月30日号）　1月19日発売

ペット相談室

## カナリヤの飼い方

高橋達志郎

カナリヤの巣引きシーズンは，春から夏のはじめにかけてです。その年の春に生まれたひなは，3,4か月もすると換羽が始まり，翼と尾羽を残して一人まえの親毛に変わります。

カナリヤの種禽を購入するには，その年の春に生まれたひなが，このように換羽を完了したころ，つまりその年の秋に購入するとよいのです。できればその年の1番子か2番子がよく，体格の大ぶりな，羽毛のよく引きしまり，つやのよい，尻のよごれていない，活発なものを選ぶことです。

**準備するもの**　カナリヤの巣引き籠は，一般に前面のみ金網になっている，木製のカナリヤ用庭箱を用います。上部の巣棚，もしくは針金でできた巣架に，皿型をしたカナリヤ用の巣を入れてやります。

えさは小鳥屋で売っているカナリヤ用の配合えさを餌入れに入れ，庭箱の底に置くか，前の網にかけてやります。ボレー粉もボレー入れに入れて，1週に1度ぐらい新しいものと替えてやるとよいでしょう。

青菜は，カナリヤがたいへん好むえさですから，平常は週に3回ほど，ひなのころは毎日きらさずに与える必要があります。水浴もまた大好きですから，毎日水浴用の容器に水を入れてやり，水浴をしたあとは直ちにそれを取りだして，別に飲水器に水を入れ，前網などにかけておいてやるとよいでしょう。

そのほかに必要なものは，巣草と擬卵を4,5個ほど用意します。

**巣引き法**　カナリヤの巣引き法もいろいろありますが，いずれもそれほど容易ではなく，何回か経験をしないと，要領を会得できないと思います。

ふつう，関東周辺では，12月か1月ごろに1番の種禽を庭箱に入れ，まず環境にならし，2月の末ごろから発情を促すようにします。

発情促進餌として，ふつうのまき餌のほかに，ゆで卵の卵黄3に対して食パン7の割合にまぜ，それに炭酸カルシウムの粉末を0.2パーセントと，総合ビタミン剤を0.01パーセントほど混入してつくった卵餌を，チョコかボレー入れに入れて与えます。朝，昼と1日2回新しいものを入れ，夕方には取り除いておきましょう。

はじめ1日おきに卵餌を与えているうち，雌雄はだんだん発情してきて，巣草を入れてやると，雌はそれを口にくわえながら，パッパ・パッパと横とびを始め，そのうち，巣に運びこむようになります。

巣づくりは，早いものだと1,2日でつくりあげてしまいますが，なかには，何回もつくりなおす雌もいます。

そのころから卵餌を毎日与えていると，やがて，産卵が始まり，毎日1卵ずつ5，6卵を生みます。卵餌は4卵を生み終えるまで続けて与え，4卵を生んだら中止します。

初卵を生んだら，毎日1個ずつ擬卵とすりかえ，4卵を生んだ日の夕方に，再び全卵を本物とすりかえます。こうすることにより，ひなを全部いっしょにかえすことができるのです。

抱卵を開始してから，14日めにひながかえりますが，この間は抱卵に専念させるために，卵餌を中止し，ひながかえったら，再び前に与えていた卵餌と青菜を並べて与えてやります。仲のよいつがいは，雌雄協力してひなにえさを運び育てます。

カナリヤの場合，むかしから血統を重んじる意味から，ナンバリングを脚にはめる習慣があり，これはかえったあと7～10日の間に入れてやります。

3，4週間もすると，ひなは巣立ちをしますが，さらに10日ほど親につけておいてから別のかごにひなを分けます。分離後のひなにはさらに1か月ぐらい卵餌を続けて与え，その他青菜や食べやすいエゴマや菜種も別の容器に入れ，だんだんにふつうのまき餌に替えていきます。
■　（小鳥の病院院長）

### 裏表紙説明

**ロバの親子**　ベドウィン族の男とかれのロバたち。アラビア人のうち，半定住のテント生活を送りながら，ラクダなどを飼って暮らしている人びとを，ベドウィンという。家畜はかれらにとってたいせつな財産であるとともに，親しい仲間でもある。

ロバはもともとアフリカの半砂漠地帯にすんでいた動物だから，粗食と水の欠乏に耐え，アラビアの砂漠でも，重い荷を背負ってゆっくりと歩いていく。ヨーロッパでは「ロバのように頑固だ」とか，「ロバのように愚かだ」といったことばがあるが，これもロバの着実さを反映しているのだろう。

実直選手権保持者のようなロバたち。男の日に焼けた顔と，節くれだった手。砂漠での生活は，どれほどきびしいだろうか。■　Ph. Aarons

▶**おことわり**　本号『もうひとつの世界』『ヒグマと2人のイノシシ』は休載します。

# アンギアリの戦い

ピーター・パウル・ルーベンス

年代不詳　デッサン　紙　45.2×63.7センチ　パリ　ルーブル美術館蔵



写真複製では，あるいはよくわからないかもしれないが，この見事なデッサンの右下隅(すみ)に，「レオナルド・ダ・ヴィンチ」という書込みがしてある。事実，このデッサンは，フィレンツェの市庁舎パラッツォ・ヴェッキオの壁に，レオナルドが描いたという壁画をコピーしたものである。

もっとも，レオナルドの壁画そのものは，結局完成されず，今日まで伝わっていない。制作の途中で，絵具の調合の具合が悪かったため，絵具が流れ出し，その上色が変わってしまったので，レオナルドが投げ出してしまったのだという。したがって，ルーベンスは，若い頃イタリアに滞在はしているが，もちろんレオナルドの壁画を見ることはできなかった。壁画のための下絵もあった筈(はず)なのだが，ルーベンスの時代にはすでに失われていた。ルーベンスがこのデッサンを描いたのは，その失われた下絵に基づいて作られた，昔の版画によってなのである。

普通ならば，コピーのまたコピーということになれば，原作の面影は大分薄れてしまうものである。しかし，ルーベンスのこのデッサンは，レオナルドの作品がいかにもこうであったろう，と思わせるような見事な迫力を持っている。もつれ合う馬のたくましい描写や，剣をふり上げた騎士の表情など，さすがに名匠の卓越した筆使いを思わせる。ペンとチョークで形をとって，ハイライトの部分にガッシュを使った入念な作品である。■　　　（高階秀爾）

## 第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉数字は号数，白ぬき数字は既刊



**世界動物百科**　通巻42号　昭和46年12月26日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



ロバの親子 ―― 説明 30ページ

雑誌 0634―12／26